

# AATJ 2016 ANNUAL SPRING CONFERENCE

## PART ONE

**Sheraton Seattle Hotel, Seattle, Washington**

**Meeting Rooms (4th Floor, Union Street Tower): Jefferson, Columbia, Boren, Seneca, University,  
Virginia**

**Thursday, March 31, 9:00 a.m.–5:00 p.m.**

**(On-site Registration and Check-in: 4th Floor Lobby)**

*Papers whose titles appear in Japanese in the program will be delivered in Japanese;  
those with only English titles will be delivered in English*

**9:00 a.m.–10:40 a.m. — Session 1**

### **SESSION 1-A: PEDAGOGY PANEL [ SENECA ROOM ]**

**Chair: Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati**

**Panel Title: 「日本語教育におけるテクノロジーを活用した学習方法の変化と今後の展望」(Change of Learning Methods Utilizing Technology and Future Directions in Teaching Japanese as a Second Language)**

**Panel Abstract:** 人間の社会生活のみならず第二言語習得理論と言語教育の分野での学習方法がテクノロジーの進化と絡み合いながら絶え間なく共に発展し変化して来ている。本パネルでは、テクノロジーを利用した多様な形態の授業において、幅の広い視点から学習効果を向上させる要因を分析した結果を報告し、今後の課題について考察する。発表1では、テクノロジーが人間の社会生活及び人的相互関係やコミュニケーションの仕方を変え、教育の指導・学習方法も進化させた変遷について第二言語習得理論に焦点を当てながら話す。さらに、言語習得のための有効なテクノロジー利用に関する研究調査課題について検討する。発表2では、誤解のない意思伝達に重要であるとみなされる韻律の習得には時間がかかるという問題を解決するため、効果的な韻律学習が可能になるようにテクノロジーを駆使して導入した日本語1年目のコースでの自律型発音学習について説明する。そして様々なテクノロジーツールを紹介し、授業への応用法を解説する。発表3では、日本語中上級レベルの学習者を対象にしたブレンデッドラーニング理論に基づいて実施した協働活動の内容とそれに対する学習者の見識を調査した結果を報告し、ブレンデッドラーニングの導入の留意点とその応用の可能性について論じる。発表4では、オンライン言語教育が一般化しつつも、学習者側の信念や動向に関して明確に実施した研究数にはまだ限りがあるため、4年間に渡って日本語初級オンラインコース受講者から収集した学習経験についての意見を質的にデータ分析した縦断調査結果を報告し、オンラインコースの今後の展望を考察する。

**「テクノロジー支援日本語学習の変遷と調査研究への展望」(History of technology-assisted Japanese language learning and future directions of research)**

**Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati**

テクノロジー支援言語学習は、1891年にエジソンの蓄音機を使用した外国語の授業が、記録上、先駆をなしたとされているが、一般的に、言語習得理論がテクノロジーとともに歩みながら進化した歴史は、1950年代の行動主義的学習論の時代に、コンピュータが主に単語・文法・発音の反復練習の一助として使用されたことから始まる。その後、認知言語学の影響を受けたコミュニカティブ支援言語学習(CALL)の時代に移り、ペースリーディングやテキスト再構成、ランゲージゲームなどの学習活動が行われたが、コンピュータは、明確な目的や計画もなく使用され、社会生活に結びついていないと批判された。行動主義へのアンチテーゼで、学習者主体を強調した学習理論である構成主義では、道具であるコンピュータを使用しながら、教員・学習者の相互作用を通じた足場作りを重要視し、知識の協働構築によって学習知識の内化が可能になる取り組みが試みられた。さらに、統合型CALLでは、マルチメディアコンピュータやインターネットなどのテクノロジーは日常的なものになり、限定された教室空間のみでの教育を超え、実社会での文脈を外国語教育の資源として活用し、相互作用の促進や学習者の自律性の育成を目指した真正性の高いタスクが取り入れられるようになった。本発表では、第二言語習得理論に焦点を当て、歴史的な変遷を辿りながらテクノロジーの日本語教育への影響とその効果について考察し、言語習得発達のためのテクノロジーの有効な使用方法を探索する目的で行われる統合型実践の評価・フィードバック・ネットワーク分析などの調査研究における問題点や今後の課題について検討する。

**「発音自律学習の促進とテクノロジー」(Enhancing learner autonomy for Japanese pronunciation learning)**

**Tomoko Shibata, Princeton University**

2013年に筆者が北米の日本語教師対象に実施した音声教育事情のアンケート調査結果によると、発音指導の必要性を認めつつ、指導法や教材が分からないと考えている教師が多い。本発表でオンラインツールなどを効果的に利用した学習法を紹介したい。韻律習得に時間がかかること(鮎澤2003)を考えると、学生が自律的に学習していく必要があり、そのためには、発音の大切さが認識でき、継続しやすい練習方法が必要である。筆者は大学の日本語1年生のコースで自律型発音学習を取り入れているが、コースブログ、コースマネジメントシステムであるBlackboard(BB)、Speak Everywhere(SE)を使い、学生、教師双方に簡便で効果的な学習法になるよう改良を続けている。SEは口頭練習に特化したオンライン学習プログラムでビデオや操作ツールが一体化している。また、筆記と音声フィードバックができ、学習者に発音の弱点を的

確に知らせることができる。学生は学期の始めに、発音の自己目標をコースブログに書き、SEで発話を録音し提出する。学習目標によって録音はシャドーイングだったり、会話練習だったり様々である。また、自律的発音学習には自己モニター力の育成が欠かせない(小河原2009)ため、毎回自己評価シートをBBに提出させる。授業ではSiriなどの身近なツールを利用した練習法、eNunciateなどの発音学習サイトを紹介し、自習を促している。教師はリソースやフィードバックの提供者としての役割をなす。本発表では、様々なツールの紹介と授業への応用例について説明する。

**「日本語クラスにおけるブレンデッドラーニングーオンライン活動とクラス内活動で紡ぐグループでの協働ー」  
(Application of blended learning strategy in a Japanese classroom: Weaving online and in-class activities for group collaboration)**

**Hisae Matsui, Princeton University**

昨今の情報技術の目覚ましい発展により、情報科学の教育での利用が、より容易に、そしてより身近になってきた。それを背景にオンラインで教育のコンテンツを提供するeラーニングが世界中で普及しているが、一方で、eラーニングと伝統的な教室での学習を融合させた「ブレンデッドラーニング」も2002年ごろから見られるようになってきており(Graham, 2006)、現在では、eラーニングの利点と伝統的な教室の利点を組み合わせる事で、より高い学習効果を目指す可能性を持つ試みとして広がりを見せている。本発表では、アメリカの大学における日本語の中上級レベルの授業で行われたブレンデッドラーニングの理論に基づくグループ活動を紹介する。この試みでは、従来の日本語の授業では個人的な活動とされがちな「スピーチ発表」と「読解活動」をこのブレンデッドラーニングの理論に基づき、オンライン活動と教室内活動に分け、またそれらを教室内で機器を使って繋げることで学習効果の向上を目指した。活動後に実施したアンケートの結果から、スピーチの原稿作成や協働の読解活動である「ソーシャル・リーディング」の過程で多くの学生が協働活動により、より多角的な視野を得る事が出来たと感じていたことが分かった。また、オンラインでのグループ活動の活発さとグループへの全体的な評価、そして、スピーチの内容の変化に相関性があったことから、オンライン活動がグループ構築、及び、学生個人のスピーチ内容の発展に貢献していたがわかった。最後に、これからの日本語教育でのブレンデッドラーニングの導入においての留意点、そして応用の可能性を論じたい。

**「オンライン日本語コースに関する学生の動向の変化」(Exploring students' attitude change towards university beginning online Japanese courses)**

**Satomi Suzuki, Georgia Institute of Technology**

昨今米国でのオンライン言語教育はより一般化しつつある。一方、学習環境の変化への順応を余儀なくされる学習者側のオンライン教育の信念や動向に関しての調査結果は未だに明確ではない。先行研究の報告によると、学習者がオンライン学習をより積極的に受け止めた結果と消極的に受け止めた結果と二分される傾向がある(e.g., Blake & Delforge, 2005)。しかしながら、個別の調査結果を相対的に比較するのは容易ではない。本発表では米国のある大学でオンライン日本語初級コースに在籍した学生(合計47人)のオンライン学習の動向を過去4年間(2012年から2015年)に渡り分析した結果を報告する。このコースはオーディオベースの会議用ソフト(WimbaとAdobe Connect)を通し、同時進行型の授業を行う。データは、宿題として学期中二度提出された「オンライン学習経験」に関する英文記述を基にし、質的分析した。結果によると、学生のオンライン学習への受け止め方は学期の始めの時点で決定する傾向にある。又、年により一定の傾向が見られる。2012年、13年では、バーチャルクラスで学習する利点を見出す学生と学習方法や環境に戸惑いを感じる学生の意見が混在する。一方、2014年、15年では、「オンライン学習」が従来の物理的な教室での学習環境に加え、一つの選択肢として徐々に学習者の間で定着していく様子が伺える。このような結果を踏まえ、オンライン学習が今後どのように変化していくべきか模索する。

**SESSION 1-B: PEDAGOGY PAPERS [ COLUMBIA ROOM ]**

*Chair: Satoru Ishikawa, Boston University*

**「第二言語読解理論を応用した初中級 CBI コースの実践: ポップカルチャーを題材に」(Second language reading theory and Content-Based Instruction: A report of a CBI course on pop-culture)**

**Yoshiro Hanai, University of Wisconsin, Oshkosh**

本発表では、発表者が開講したポップカルチャーを題材にした内容重視の日本語コース(三単位)を例に、初中級教科書で学習中の学習者を対象に内容重視のコースを開講することの必要性和、コースデザインに第二言語読解理論(Grabe 2009; Koda 2005 等)を活用することの有効性について議論する。外国語教育において内容重視のアプローチを取り入れることの重要性は多く指摘されているが、一般的に初級段階からの非言語的内容(文化など)の導入は、特に漢字を使う日本語のような言語においてはかなり限定されてしまう。しかし、初級段階から、ポップカルチャーのような学習者の関心が高いトピックを題材とした内容重視のコースが開講出来れば、履修者数の増加や初級学習の強化、中級への繋がりへの向上など、多くの利点が見込まれる。実際に発表者が開講したコースにおいては、履修者数が上限に達した。学習者の減少が危惧される昨今において、このようなアプローチの必要性は非常に高いと言える。内容重視のカリキュラムはその理論化が遅れていることが指摘されており(當作 2010)、初級レベルでの開講となるとそれに特化した方略も必要となる。発表者は、第二言語読解理論を理論的枠組みの柱に据え、学習者に各課3,500字以上の高度な認知処理を必要とする長めの読解を提供しながら、語彙認識や文型理解など基礎レベルの認知処理にも焦点を当てる教材を作成した。発表では、実際の教材や学習者へのアンケート結果を基に、第二言語読解理論を柱にしたコースをデザインすることの有効性を主張し、内容重視の日本語コースの理論化への貢献を目指す。

**「グローバルスカラー育成のための内容重視授業(CBI)「生物学」(Biology in Japanese: Content-based instruction (CBI) to foster “Global Scholars” at the University of Oregon)**

**Yukari Furikado-Koranda, University of Oregon**

本校では、2010年にグローバルな舞台で活躍できる人材を送り出すことを目的とし、Japanese Global Scholars Program (以下JGS)を立ち上げ、日本語上級学習者を対象に内容重視教育(以下CBI)のコースを始めた。多くの研究でCBIが第二言語習得に有効な1つの枠組みになっていることが報告されている(Grabe & Stoller 1997, Met 1991, 1999, Snow 2001)が、学問的、言語的、専門的にたけた人材の育成だけでなく、流動的で多様化している現代社会を生きて行くための思考力、洞察力、柔軟性の育成も重要であると私たちは捉えた。そして、具体的にどのように既存の日本語プログラムと連携させて行くかを考慮した上、既存の4年生までの日本語プログラム(1-4レベル)の上に3段階のCBIコースを付け加え、レベル5をAcademic CBI prep、レベル6をPartial Academic CBI、レベル7をFull Academic CBIと位置づけた。本発表では、まずJGSプログラムの意義とコースの概要を紹介する。次に様々な内容で応用出来るCBI授業のモデルとして、発表者が行ったレベル6 Partial Academic CBIの「生物学」の授業のコース開発、実践について報告し、グローバルな人材に必須の要素は何か、それらの要素を日本語教育を通して養って行くにあたっての我々教師の役割は何かを考察したい。

**「学生個々の興味と必要性を重視した上級日本語クラスにおける日本研究教授との協働授業の可能性」  
(Exploring possibilities of collaboration with content specialists in an advanced-level Japanese course emphasizing students' individual interests and needs)**

**Shino Hayashi, Washington University in St. Louis**

近年、内容を重視する教育が特に中上級レベルにおいて注目を集めており、テーマごとに様々な内容を介して言語が教えられている。しかし、言語教師はその内容の専門知識がない場合が多く、この教育法には限界があるという声もある。そこで、言語教師が同じ大学に属する日本研究の教授と協働で文学や歴史等を教えるという画期的な授業も行われている。ただ、この場合、学生は果たして扱われる内容に興味があるのか、その内容は学生の将来に役立つのかという疑問が残る。本発表では、学生個々の興味と必要性を重視した大学4年生コースの実践を紹介し、日本研究の教授との協働授業の可能性を考察する。対象の4年生レベルは同大学日本語プログラムの最終学年であることから、このコースの目的は、コース終了後も教師の助けを借りず自律して言語学習を続けるスキルを身につけることである。クラスはグループ・セッションと個人セッションに分かれており、グループ・セッションでは、テーマごとに教材の内容理解とディスカッション、作文、発表等の活動を行っている。個人セッションでは、学生と教師が一对一で面談し、学生が教師の助けを借りて選んだ小説や新聞記事、テレビ番組等の教材を扱い、内容理解・ディスカッションを行ったり、学生が興味を持つ内容の専門家にインタビューし、内容報告・ディスカッションを行ったりしている。学生からは興味深く且つ自分の将来に役立つということで高い評価を受けている。発表では、グループ・個人セッションの具体的な内容と流れ・課題を説明すると共に、学生の選択した教材を分析し、更なる内容強化のためにどのような方法で専門家と協力できるかを検討する。

**「演劇的手法を取り入れた読解、作文、会話、音声表現の指導の試み ～小説の読解を脚本につなげて朗読する～」**

**(Trial in applying a theatrical approaches to reading, writing, dialogue and phonetic practices: Connecting novel reading, writing, and discussion)**

**Satoru Ishikawa, Boston University; Mika Oidaira, Hiroshima University**

外国語教育で小説を使用する目的としては、読解能力の向上や批判的思考の育成、語彙や文法表現などの運用能力を高める等があるが、それに加え読解にとどまらず文化の理解や口頭表現・文章表現の指導が行える(ハドソン2008、下條他2014)ということが言われている。一方で最近注目を得ている演劇的手法を取り入れた指導は、言語の4技能を総合的に指導でき、更に教科書のような型にはまった会話ではなくて、自然な会話の習得につながる(野呂他2012)と指摘されている。そこで本研究では、独立した活動として実施されがちな小説の読解と演劇的な手法を結びつける試みを上級レベルで試みた。通常の小説の読解終了後、1. 小説の一場面を指定し、その部分を発展させる形でストーリーを学習者に想像させ、脚本としてまとめさせ、2. 出来上がった脚本を朗読するという活動を行った。脚本を書くためには、登場人物の背景(年齢や職種等)や人間関係等を小説から注意深く読み取った上で、脚本中の登場人物の心情、発話場面等を考慮し、それらに相応しい発話表現を考えることが求められる。更に、物語が破綻しないように流れや構成にも注意が必要となり、総合的な日本語能力の練習として有効であると考えられる。一方で、上級ではあまり重視されない音声指導も、朗読を通してアクセント、間、プロミネンス等を指導することにより、学習者自身の音声を意識化させ、音声表現力を向上させることにつながると思われる。このような読解、脚本、朗読を連携させた指導は、個々の技能のみならず、学習者の創造性を一層に刺激しより活発な日本語学習につなげることが期待できると考えられるので、その実践と学習者からの声を報告する。

**SESSION 1-C: PEDAGOGY PAPERS [ BOREN ROOM ]**

**Chair: Mieko Kawai, University of Virginia**

**「学習者同士のフィードバックを活かした個人プロジェクト」(Collaborating with classmates in an independent project)**

**Junko Hatanaka, University of Texas, Austin**

中上級の日本語クラスでは、個々の学習者の日本語学習の動機、学習歴、日本文化への興味、日本語の習得度などにも個人差があり、学習者全員を満足させるには、自律学習(Independent Study)が有効な手段の一つとされている。しかし、

少人数制のクラスではそういった活動も可能だが、より大規模なクラスでは、クラス運営としての時間的な制約もあり、また学習者も教師一人からの評価では、その動機づけも十分でないなど自律学習そのものが困難となる。本発表では、自律学習において他の学習者からのフィードバックを活かしながら、クラス運営の中でいかに学習者主体のプロジェクトが実施できるかの検証である。アメリカ南部の州立大学の中級レベルの日本語会話クラスで、学習者は約12週間に渡り、自らテーマを選び、その学習方法や作業量も自ら設定して個人プロジェクトを実施した。学習者は約2週間ごとに教師にレポートとして、プロジェクトのアウトプットを提出した。またクラス内で各自がその経過報告を行い、クラスメートからフィードバックを得ると同時に、クラス内限定のウェブサイトのディスカッションボードにそれまでのアウトプットを順次アップロードし、他の学習者のテーマで興味のあるものには、学習者がコメントを書くなど互いに意見交換を実施した。学習者が選んだテーマは、日本のドキュメンタリー番組の字幕作りや、アニメの翻訳や日英単語リスト作り、方言の学習など多岐に渡り、学習者の多様性がより活発なフィードバックを生んだ。プロジェクト自体を評価するために学期末にアンケートを実施し、その結果を分析しながら、個性の重視とクラスでの協力体制の接点を考える。

**「実践と応用の場を作るー日本文化と生活を探るプロジェクト」 (Creating hands-on experiences for language learners: A project that explores Japanese culture and life)**  
**Kayo Nonaka, New York University**

本発表は実践と応用を目的としたプロジェクトの実践報告である。筆者が所属する大学は大都市にあり日本人居住者も多く、日本関係の物事が豊富である。かといって、学生の多くが利用している訳ではなく、その存在さえ知らない学生も少なくない。この恵まれた環境を学生に認識させ、いかに日本語カリキュラムに取り入れるか。そこで、学生が実際に向いていって日本語で体験するプロジェクトを考えた。このプロジェクトは中級レベルの2コースで実施。学生は教室以外で日本語を使える場について調べ、関心のあるトピックを決定後、日本語を使って取材するというものである。学生は、個人、ペア、三人のグループに別れ、以上の作業をこなしていった。レポートはコース専用のウェブサイトに載せ、常時お互いのレポートが読めるようにし、学生同士が感化しあえる環境にした。トピックとしては和食レストラン、日本の本屋、日本関係の美術館、日本文化のイベントへの参加、日本人のグループへの加入等、多岐に渡った。最後のクラス発表では、各自の取材結果を報告した。後のアンケートでは、大半がプロジェクトを好意的に捉え、自分の選んだトピックについて深く学ぶことができたと感じていることが確認された。日本語を実際に使った経験はコミュニケーションが成功したか否かに関わらず、今後の学習に向けての励み、また、目標設定にもなったことも確認できた。本発表では、プロジェクト実践の過程を詳述し、学生の作品、フィードバックを紹介しながら、本プロジェクトにおける動機付け、体験を経ての言語学習について報告する。また、評価方法についても触れ、今後の課題、その他の可能性について考察する。

**「上級日本語コースにおける「研究プロジェクト」：学習者が用いた戦略の考察」 (A study on learning strategies used in a research project for advanced Japanese learners)**  
**Ibuki Aiba, Dickinson College**

本研究は、2014年および2015年に筆者が担当した上級日本語コースにおける「研究プロジェクト」の実践報告と、その過程で学習者が用いた戦略の考察である。本プロジェクトの目的は、専門分野が異なる学生それぞれに口頭発表とレポートの作成を課すことによって、研究方法の習得と日本語能力の向上、および個々の学習者の問題解決能力の育成を図ることである。筆者は当初、学習者が課題を遂行した結果（プロダクト）のみ重視していたが、指導を重ねるにつれ、学習者の課題の遂行過程（プロセス）に注目することの重要性に気づいた。よって本研究では、テーマの設定から口頭発表およびレポートの作成までの一連の流れを「問題解決プロセス」と捉え、学習者が各課程において用いた戦略を、インタビュー調査および教師の観察と授業記録から考察する。また、その結果から、学習者の問題解決能力の育成に特に密接に関わる戦略を明らかにする。戦略の考察においては、Oxford (1990) が提示した6つの学習戦略（1. 直接戦略：記憶、認知、補償 2. 間接戦略：メタ認知、情意、社会的）の観点を用いる。学習戦略は「学習上のある問題を特定し解決するための知識や行動」(Rubin 1999)であると言われるが、これは言語学習に限らず、学習者が社会で直面する様々な問題を自ら解決してゆくために必要不可欠な力である。よって最後に、高い問題解決能力を備えた学習者の育成に求められる日本語教育のあり方にも言及する。

**「「発表」をゴールとしないファイナルプロジェクト：学びの共有を目指すカリキュラムの試み」 (Process-focused final project in a collaborative learning curriculum)**  
**Mieko Kawai, Tomoko Marshall, and Tomomi Sato, University of Virginia**

学期末にリサーチプロジェクト等を行うことで、様々な分野での知識を深めるとともに総合的な日本語運用能力を伸ばし、学習意欲の向上を目指すプログラムも少なくないであろう。しかし、教師は提出されたドラフトの添削と発表当日の評価に終始し、学生は授業外で強いられる負担のため、とにかく無事に発表を終了することが最大の関心事となりやすい。筆者の大学においては、学生の満足度は高かったものの、聴衆としての他の学生の関心度の低さ、発表後の話し合いの深みのなさ、教師と学生のグループワークの捉え方の違い、及びその指導と評価の難しさ、内省の機会がなく学習効果が明確ではないことなど、数々の問題が浮き彫りになってきた。そこで、学習者のニーズやプログラムの長期的ゴールに鑑み、学期末プロジェクトの必要性や意義を問い直し、活動の種類や形態、教室内外での課題、評価方法などを抜本的に改訂するに至った。複数のレベルの教師間で話し合った結果、「発表」をゴールとせず、発表準備のプロセスや発表後の内省、意見交換による気づきや新しい価値観の創造などに焦点を当てた相互学習型のプロジェクトを行うこととした。ここでは、トピックの選定、資料探し、内容や構成の考察、経過報告発表、ドラフトの推敲などの各段階で「協働」「他の学生の学びに貢献すること」などをキーワードとする。本発表ではこのプロジェクトをコミュニケーション能力、問題解決能力、情報活用能力などといった21世紀型スキルの育成を目指す活動の一例として紹介する。同時に、この取り組みはプロジェクトを題材に教師間で対話を重ねるプログラム内アーティキュレーションの試みであるということにも注目されたい。

## SESSION 1-D: PROFICIENCY ASSESSMENT SIG PANEL [JEFFERSON ROOM]

Chair: Ken-Ichi Miura, Franklin & Marshall College

### Panel Title: 「新しい時代の学生のための日本語教育: Proficiency Guidelines 2012 を基にして」 (Japanese Language Education in the New Era: Proficiency Guidelines 2012 and Their Usage)

**Panel Abstract:** 日本語学習者数がピークとなった80年代後半から、学習者の減少期を経て、今、日本語教育は新しい時代を迎えようとしている。テクノロジーの発達、学習者の興味の変遷、学習者層の拡大等、日本語教師が利用できる事項、考慮せねばならない問題も新しいものとなっている。汎言語において、このような新しい時代のアセスメントの指標として、2012年にACTFL Proficiency Guidelines (4技能) が設定された。本パネルでは、ガイドラインがどのように新しい時代の学習者のために利用できるかに焦点を置いている。発表1では、日本語2年において、ガイドラインを基に作成された生教材と効果、問題点を提示し、より良い教材作成の提案をする。発表2は、ガイドラインとスタンダードを併用し、学習者主体の教室というコミュニティを設計し、中上級の学習者のproficiency向上を目指す試みについての報告である。発表3は、最近の多くの学生が興味を持っているアニメ、漫画を各レベルでどのように効果的に活用したかを述べる。発表4は、新しい学習者層である日本における外国人児童の日本語教育について言及する。日本の公立学校での日本語教育の現状について報告し、彼らが必要とするproficiencyに言及しつつ問題解決の糸口を探る。発表後、質疑応答、討論などを通じて、参加者と共に、新しい時代の日本語教育を考える機会を提供したい。

### 「言語運用能力ガイドライン2012版を基盤とした初級後半コースのカリキュラム構築の試み」 (Creating curricula for advanced-beginning level courses based on the ACTFL Proficiency Guidelines 2012) Mayumi Ishida, Dartmouth College

これまで、大学レベルの中級、上級の言語コースにおいて、「話す」能力の到達目標設定にOPI (Oral Proficiency Interview) の評価基準を用いてきた。その目標を踏まえ、各コースの授業内活動、課題、プロジェクトを含むカリキュラムを作成してきたが、「話す」以外の言語能力、「聴く」「読む」「書く」については明確な指標がなく、その点においては常に迷いがあった。特に、中、上級のコースの根幹となる読み・視聴覚教材選択においては、このレベルの学生が、一体どのような日本語が読めるようになるべきか、聞いて理解できるようになるべきか、また書けるようになることを目標とすべきか、形、内容共に試行錯誤することが多かった。ACTFL言語運用能力ガイドライン2012版完成後、言語四技能全ての指標が明らかになり、既存の中級、上級の言語コースのカリキュラムを少しずつ改変し始めている。それと同時に進行で、今回初級後半のカリキュラム見直しの機会があり、新たにカリキュラムを作成する際にACTFL言語運用能力ガイドライン2012版を参考にすることにした。これは大学レベルの二年生に当たる言語コースであるが、市販の初級用教科書ではなく生教材を用い、コース終了時まで「中級」レベルの言語機能に到達することを目標としている。今回の発表では、新しい時代の学生が興味を持ち、設定言語目標に到達するためにはどのような教材を選び、それをどのように使用すべきか。このレベルにおける文化理解能力向上のためには、どのようなことができるのか。また、カリキュラム構築における、中、上級とは異なった問題点、その解決法模索への試みなどについて言及したい。

### 「デジタル・ネイティブ世代の学習者を対象にした学習者オートノミー獲得への一実践例」 (Exploring ways to support digital native generation learners' acquisition of learner autonomy) Momoyo Kubo Lowdermilk, Stanford University

21世紀に求められる外国語教育として、ITリテラシー、思考力、協働力などに焦点をあてた学習指導の指針が開発されてきている。スタンフォード大学 (ランゲージ・センター) では、1997年より、「対象言語使用国での居住・就労・勉学・研究が実現できるような外国語学習者の育成」を教育使命とし、その目標達成のために、全米外国語教育協会 (ACTFL) が提唱・構築してきたプロフィシエンシー・ガイドラインと、National Standards in Foreign Language Educationによって作成された21世紀の外国語学習スタンダード (Standards for Foreign Language Learning for the 21st Century) をカリキュラム・デザインの中心に据えている。本発表では、日本語学習履修時間数が450時間前後の、中級-上レベル (Intermediate-High) から上級-下レベル (Advanced-Low) の学習者が多数のクラスでの授業活動の一片を紹介する。上に言及した ACTFLプロフィシエンシー・ガイドラインと21世紀の外国語学習スタンダードを軸にデザインした反転授業を行い、対話・振り返り・気づき・協働作業を重視し、「学習者主体の教室というコミュニティ」の設計と構築、および学習者支援を目指す。テクノロジーを取り入れた言語学習空間が、デジタル・ネイティブ世代の学習者のオートノミー獲得に寄与できるかを模索したい。

### 「アニメ、漫画から社会問題へ：中上級におけるポップカルチャー」 (Anime, manga and societal issues: Pop culture in intermediate and advanced Japanese classes) Ken-Ichi Miura, Franklin & Marshall College

アニメ、漫画等のポップカルチャーが日本語学習者の履修理由の一つの大きな理由であることは、近年よく知られていることである。このような「新しい時代」の学生の興味を考慮し、本学では、ACTFL Proficiency Guidelines 2012を基に積極的にポップカルチャー教材を開発している。本発表では、中上級の学生のproficiency向上のために、どのような教材を用い、どのように指導したかを報告する。中級レベルにおいては、「身の回りの話題」の段落レベルの叙述の練習をさせるため、「月刊少女野崎くん」の漫画版、アニメ版を併用した。文の結束性を高める練習として、各学生に個別の登場人物の行動等を叙述させる等のタスクを与えた。また、中級上の学生には、「自分の中のもう一人の自分」というテーマを与

え、「進撃の巨人」「寄生獣」等を用いて、上級の素地固めをすると共に、超級のタスクである抽象概念の叙述を授業に盛り込んだ。YAOI漫画に興味を持った上級レベルの学生には、「風と木の詩」に始まり最近の動向までを、研究論文を参考にして細かく分析させ、口頭発表、小論文作成等のタスクを与えた。また、実際にYAOI読者にインタビューするなどのフィールドワークの結果を最終論文に織り込む、等の指導を通して、話す、書く、両技能において、超級レベルの達成を目指した。学年末のアセスメントは、これらの教材、指導によって、学生のproficiencyが向上したこと、また、自主学習教材としてのアニメ、漫画の有効性も示唆している。本発表は、これらの授業報告を通じて、今後の使用を参加者と共に考察することを旨とする。

**“Japanese language (Nihongo) education for immigrant students in public schools in Japan and the issue of language proficiency”**

**Naomi Asakura**, Franklin & Marshall College

This paper discusses the current curriculum of Japanese language (Nihongo) education for immigrant students in public schools in Japan and provides suggestions to improve students' language achievement and proficiency. Like other developed countries, Japan is facing sensitive global issues. Considering the fact that the working population is decreasing, the Japanese government has started to accept an increase of foreign workers. This has caused the number of immigrant students to gradually and steadily increase in Japan. Nowadays many public schools provide Nihongo education for immigrant children. Regardless of the growing population of immigrant students, however, the percentage of their enrollment in high school is still low compared to that of Japanese native students. One of the primary reasons is the Nihongo proficiency of immigrant students. Historically, Nihongo education started to support *kikokushijo*, and later it expanded to foreign students. Due to this historical background, there were not specific policies or standards of Nihongo proficiency for immigrant students. “The Manual for Accepting Foreign Children” was published in 2011 by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT); however, established criteria for language achievement for immigrant children standardized by this document are still ambiguous. Moreover, the regional inequality in Nihongo education has remained because the manual is not legally binding. Although the Japanese government currently hesitates to get involved in these issues, and shifts the responsibility to the local governments/education boards/schools, it is important to have clear criteria for the language level of immigrant students at the state government level in the near future. This paper suggests ways to reform the education policy and create more specific standards of language proficiency for immigrant students in order to provide them with a better opportunity to be educated at a higher level.

**SESSION 1-E: LINGUISTICS PAPERS [ UNIVERSITY ROOM ]**

*Chair:* **Hidemi Riggs**, University of California, Irvine

**“Showing subjectivity in the construction of intersubjectivity: Use of ‘shi’ in conversations among Japanese native speakers”**

**Noriko Noma**, Kapiolani Community College

The previous studies suggest that particle *shi*, which is traditionally categorized as connective particle, now has a function to mark the speaker's affective stance—the function similar to interactional particles (Sakakibara, 2008; McGloin & Konishi, 2010). This study aims to analyze the discourse functions of particle *shi* in Japanese conversation from the perspective of discourse as a sequentially-organized activity, and argues that particle *shi* used at the end of an utterance marks speaker's subjectivity (speaker's stance) in an effort to construct intersubjectivity with his/her interlocutor, as other interactional particles contribute to the co-construction of intersubjectivity. The research questions are: 1) What are the discourse functions of *shi* in mundane conversations among speakers of Japanese?; and 2) How do these functions contribute to the collaborative construction of intersubjectivity by the speaker and his/her interlocutor? By analyzing the activities in talk before and after the use of *shi*, the following functions of *shi* are proposed: 1) *shi* is used after the expected intersubjective alignment was not realized; 2) *shi* marks affective stance of the speaker; 3) *shi* proposes a shift in direction of the ongoing activity 4) *shi* expresses the protest toward the ongoing activity; and 5) *shi* curtails the next turn from the interlocutor. Furthermore, it is concluded that the speaker of *shi* assumes the right to go into the territory of the hearer based on the relationship that he/she has with the hearer.

**“Multiple levels of style-shifting in Japanese discourse”**

**Shiho Yamamoto**, University of Arizona

This paper investigates multiple levels of honorifics at the discourse-level including (i) plain, (ii) casual-polite, (iii) semi-polite, and (iv) polite. Scripted dialogue between two female Japanese participants in a television drama is used to 1) verify the position of ‘casual-polite’ style on the politeness continuum, 2) disclose the function of style-shifts by using Ikuta's ‘distance’ analysis as a major tool and, 3) examine how the analyses are different and/or similar between the different levels of styles. This study reveals that the ‘casual-polite’ style should be placed between the plain style and semi-polite style on the politeness continuum. In addition, the functions of style-shifts at the discourse level are mostly accordance with Ikuta's analysis, and the motivations behind the style-shifts are largely social distance, attitudinal distance, and cohesion distance. While style-shifts occur regardless when adjusting the distance between interlocutors, it is not necessarily true that using a lower speech level always minimize the distance between the participants. In any case, the participants manipulate style-shifts skillfully as a conversational strategy.

## **"A corpus analysis of the modal marker 'daroo' in Japanese**

**Tamika Jimbo**, University of Oregon

Modality is an important linguistic category that expresses possibility and necessity. In Japanese, 'daroo' is one of the modal markers that serve this function. Typically Japanese textbooks introduce 'daroo' with two meanings: probability and conjecture. However, this study reveals various meanings and usages of 'daroo' by examining conversations retrieved from the contemporary Japanese TV drama "HERO". The analysis was based on prior observations of the meanings of 'daroo' as having the function of imposing (Saegusa, 2003), pointing out (Asano, 2011; Saegusa, 2003), confirming (Johnson, 2003), meaning "probably" (Larm, 2009; Johnson, 2009), and meaning "I wonder" (iatkobchai, 1995). All these meanings were observed in the data, but the strength of meaning correlated with the variant forms of this marker ('daroo' vs. 'daro'). In addition to the functional aspect, the patterns of co-occurrence between 'daroo' and speaker gender, formality, and intonation were also investigated. The correlation between gender and formality, in particular, showed interesting results. Furthermore, the 'daroo/deshoo' distinction, which has been thought to be a casual/polite distinction, did not perfectly align in the data. This suggests that the 'daroo/deshoo' distinction has taken on a distinct meaning beyond formality. This paper also examines several Japanese textbooks with regard to the introduction and explanation of the modal marker. It further proposes some effective and meaningful classroom activities for learning 'daroo' based on the findings of the analyses. It is hoped that an in-depth study of the usage of these modal markers will prove useful to those attempting to teach natural-sounding Japanese to learners.

## **「現代母語者の「帰る」「戻る」の使い分け：補助動詞も含めて」(Rule, pattern, and meaning in the word selection of 'kaeru' and 'modoru' in modern Japanese)**

**Hidemi Riggs**, University of California, Irvine

学習者にとって「帰る／戻る」の使い分けを習得するのは容易ではない様だが、小稿では二語の意味論的相違を往路復路という概念とそこに置く焦点度という観念の二視点を設定し、相互に意味が重複しない文法説明を提唱している。両語の英訳はto returnが一般的であり、広辞苑にある「帰る」は元の場所にもどる、「戻る」は元の場所にかえる、との記述が暗示する様に、出発点と移動の方向の関係では両語の違いを説明し尽くせない事が伺える。実際、百年前に出た長谷川時雨の戯曲の中にも「帰(もど)りました」と読ませる箇所があり、当時は二語の使い方が峻別されていなかった事がよく分る。調査の分析に用いたデータは印刷物、テレビの日本語放送からの録画で構成されている。その内、(1)両語の入れ替えが起こっているミニマルペア、(2)動詞に付された音声強調や字幕の色彩・大型文字、(3)同一／複数話者が同一指示物に対して語を使い分けしている(例：避難先から自宅への行程を「戻る・帰る・行く」と言い分ける)、等の使用例を重点的に吟味した。その結果、現代母語者は場所と方向の関係認識スキーマに因って語を選んでいるのではなく、「復路を一環した行程の一部として認識するのか、あるいは復路だけを取り上げ焦点化して提示したいのか」という意思伝達上の意図で選ぶ、という結論に達した。指示物が回帰して来る事態が必定と意識されている文脈では「帰る」が使われ易く、そうではない場合には「戻る」が使われているパターンが現れていた。本稿では提唱の復路焦点化モデルの有効性を近來日本社会で発生した自然災害ならびに人為的災害の報道から得た録画を使って検証を行なっている。

## **SESSION 1-F: LITERATURE PAPERS [ VIRGINIA ROOM]**

**Chair: Joanne Quimby**, North Central College

### **"Reviving Good Wife/Wise Mother ideology: Kataoka Teppei's "Two Professional Working Women" as nationalist propaganda"**

**Yumi Soeshima**, West Virginia University

Kataoka Teppei's (1894-1944) life runs almost in parallel to the rise and fall of the Japanese Empire as a modern nation-state and his literary works indeed mirror the significant phases of modern Japanese cultural history. Actively subscribing the fads of the time, he made several literary and ideological conversions. Though he is not particularly considered as a distinguished writer, he nonetheless produced a wide range of worthy works from popular fictions and critical essays to translations, and many of his stories are skillfully crafted. This paper argues his "Two Professional Working Women" (1941) as an indication of his nationalist stance by reviving "good wife/wise mother" ideology that Meiji government initially incorporated as a part of modern nation-state building. In his stories, women's identities and aspirations are systematically taken negatively. It is romance plot of love and marriage that dominates the narrative. Although many women were often in dilemma between tradition and modernity, his seemingly over-simplified, one dimensional female figure sharply contradicts a historical reality of consistent and remarkable increase of the number of professional working women in the 1920s-30s. In this context, Miyamoto Yuriko's "Pavement" (1932), which offers a more plausible representation about working women under capitalism, can be read as a counter-narrative to Kataoka's text. His position ideologically intertwined by gender and nationalism needs to be scrutinized.

### **"Transpacific feminism: Yamada Waka and Japanese immigrant women in the Pacific Coast region"**

**Rika Saito**, Western Michigan University

During the 1930s, between Japan and China, armed conflicts frequently occurred and an undeclared war finally began. In such a brutal period, various Japanese women's associations engaged in issues from women's rights to motherhood protection, and they became quite active even under pressure of governmental censors. Yamada Waka (1879-1957) was among the committed participants of women's collective efforts, and an advocate of motherhood protection. In October 1937, she departed for Pacific Coast as a delegate of "mothers" to talk to American women, particularly Japanese immigrant women in the United States. This

paper will examine how Waka's visit made a strong impact on the Japanese-American community in the Pacific Coast region, and explore how their reaction and connection to Waka formed a transpacific feminist solidarity. Yamada Waka was part of the People's Mission (Kokumin shisetsu), a private delegation from Japan, which was organized to mitigate thundering criticism from the US and Europe after the Marco Polo Bridge Incident in July 1937. Waka was the only female representative of Shufu no tomo, the best-selling women's magazine whose primary readership was Japanese mothers and wives, not only in Japan but also in Japanese residences overseas. Her lecture circuit stretched from California, Oregon, and Washington state to Washington D.C. where she met the first lady Mrs. Eleanor Roosevelt. Details of her traveling schedules and reports on lectures appeared in Japanese-American newspapers every day. My research is primarily an analysis of the local newspaper articles showing that Japanese immigrant women were enthusiastic about hosting their guest coming from their home country and donating to the causes that she described in her talks. These articles also show a developing Japanese immigrant nationalism and the connection of Japanese-American women to the women's movement in Japan, through their financial support of Japanese mothers and children in difficulty.

#### **"Alternate (re)productive bodies in Shirai Yumiko's "Wombs""**

**Kazue Harada**, Miami University

For decades science fiction has provided new ways of rewriting reproduction. In particular, the pregnant condition offers an opportunity to engage the question of human corporality and the interconnected relationship between human bodies and various substances in the environment. In her science fiction manga WOMBS (2009-), Shirai Yumiko (b.1967) imagines an alternative way of thinking about (re)productive bodies. In the story, women soldiers who are pregnant with alien organisms known as niibas can jump to wherever these foreign organisms are. Because of their extreme mobility, they have the privilege to fight the enemy in war. Referring to Stacy Alaimo and Susan Heckman's concept of material feminisms and Donna Haraway's "companion species," this paper will explore the ways in which Shirai's work interrogates the notions of pregnancy, fetuses, motherhood, and ethical and political issues of reproduction through pregnancy of non-humans. This manga provides a critique of the pro-reproductive policies that were meant as countermeasures to the low birthrate in contemporary Japan. At the same time, it reveals a deep ambivalence toward pregnancy.

#### **"Visualizing female sexuality in Matsuura Rieko's "The Apprenticeship of Big Toe P""**

**Joanne Quimby**, North Central College

The plot device of the "big toe-penis" brought instant acclaim to Matsuura Rieko's 1993 novel Oyayubi P no shugyō jidai. Featuring a traveling sex show and a female protagonist whose big toe has turned into a penis, the novel deconstructs hetero-normative sexuality and hetero-normative attitudes towards gender, sex, and sexuality. While literary critics and readers alike have tended to focus on the spectacle of toe-penis itself, this paper will consider instead the various ways in which Matsuura's complex text thematizes performance, specifically the role of spectatorship and the visibility of performance. In addition to the central role of the traveling sex-show troupe, which foregrounds the role of spectatorship and highlights the performative nature of sex and sexuality, the recurrence theatrical metaphors further indicate Matsuura's concern with issues of visibility and spectatorship. Through the eyes of the female protagonist, who now bears a penis on her foot, "sex," "intimacy," and "sensuality" take on new meanings, and it is through her observations of sex show performances and reflections on her own experiences that Matsuura interrogates socially constructed interpretations of normative sexuality and suggests possibilities for more expansive approaches to intimacy and sensuality.

**10:50 a.m.-12:30 p.m. — Session 2**

#### **SESSION 2-A: PEDAGOGY PANEL [ SENECA ROOM ]**

**Chair: Yuka Kumagai**, University of Southern California

**Panel Title: 「読む！読む！読む！：日本語力全般を引き上げる自発的読書の支援」 (Read! Read! Read! – Supporting students' free voluntary reading to enhance Japanese language proficiency)**

**Panel Abstract:** 母語習得においても外国語習得においても自発的な自由な読書 (Free Voluntary Reading) が読解力だけでなく、書く、聞く、話すなどの言語能力全般を引き上げることは多くの研究で明らかにされてきた (Krashen 2011)。自発的な自由な読書とは、自分で選んだものを自分の好きな速度で、やさしいものからできるだけたくさん読むということである。近年、日本語教育でも自由読書や多読を課外活動やクラスの一部、あるいは独立したコースなど様々な形で取り入れる現場が増加している。このパネルではこれらの自発的読書の実践の内容を報告し、その意義を考察するとともに、現在利用できる読み物にはどのようなものがあり、何が不足しているのか、その不足をどう補っていいのかということを考える。発表1と2は大学における多読授業の実践報告である。発表1は従来の日本語の教室とは異質な教師の役割や評価のあり方について報告しつつ、学生の読みのレベルの伸長度と読み物の充実度との関係に言及する。発表2は期末プロジェクトで生まれた創意ある作品の紹介を通して、自由読書の内容と量が四技能の向上、及び自律学習に効果をもたらすことを示す。発表3は日本語多読に不可欠なレベル別読み物を作成してきた立場から、作成の留意点と課題、母語話者向けの書籍を多読に利用する際の選択基準を述べる。発表4はオンラインの辞書機能を付加することで中・上級の学習者が母語話者向けの読み物をそのまま読むことを可能にした読み物コレクションとそれを利用したプロジェクトを紹介する。

## 「多読授業における教師の役割・評価・学生の伸び方」(Teacher's role, assessment, and students' progress patterns in Extensive Reading class)

Yuka Kumagai, University of Southern California

2015年の「USC日本語多読ワークショップ」開催後に日本語教師対象に行われたアンケート調査の結果を見ると「多読をぜひ取り入れてみたい」という意見が圧倒的に多かった一方で、多読をどのようにカリキュラムに組み込むのか、実際の授業はどういうものなのか、というイメージをつかめず戸惑っている教師も多いことが分かった。これまで日本語多読に関しては、熊谷(2013)、熊谷・バイアロック(2014)、熊谷・額(2015)、額(2015)がそれぞれ、多読クラブの効用、多読文庫の立ち上げ、多読授業内の活動、多読と自己評価について述べてきたが、本発表では日本語多読授業について(1)教師の役割(2)評価の方法(3)学生の伸びの3点に焦点を当て、3年間の実践報告を行う。「教えない、押し付けない、テストしない」という多読三原則(酒井2002)の下での教師の役割は学習者を励まし支える支援者であり、学習者のレベルや興味にあった読み物と読む環境を用意する情報提供者であり、学習の進行を観察し記録する学習管理者であることである。大学の授業である以上、成績を出さなければならないが、各自の異なる取り組みを見守る多読クラスの評価には教師と学生との対話が重要であることが分かってきた。また、読書記録と学生へのアンケート調査の分析からは、学生のような伸びやつまずきのパターンが見えてきた。多くの先行研究(Hitosugi and Day2004他)及び実践の経験から、多読が学生の日本語能力全般を引き上げていくことは確信できる。しかし、より効果的な能力向上のためには多読用の読み物のより一層の充実が肝要であることを指摘する。

## 「読む」から「創る」へ：日本語多読プロジェクトの試み」(From input to output: Creative projects in Japanese extensive reading)

Noriko Hanabusa, University of Notre Dame

本発表では、多読プロジェクト作品と自己評価資料を分析し、多読が日本語力全般、及び自律学習にもたらす効果について考察する。筆者は大学図書館にて2014年より多読授業を開講している。主な活動は教室内個人読書、読書記録、自己評価等であり、成績の20%を学期末プロジェクトに当てている。学習者はフォーマットや内容を自由に選び、多読活動にinspireされた作品を作り、ブース形式で発表する。これまでの作品は創作・翻訳・ブックトークに大別され、手描きの絵本、オンラインゲーム、すごろく等、独創性にあふれるものが揃った。アンケートからは、全員が楽しんで活動に関わり、クラスメートの発表に刺激を受けたことが分かった。外国語習得には、バランスのとれたmeaning-focused inputとmeaning-focused outputが不可欠であり、多読はinputとして重要である(Nation 2014)。読み中心の多読授業の中で、プロジェクト作品の作成・発表は、書く・話す力を巻き込むmeaning-focused outputの場をも提供していることになる。また、最も多い物語創作の企画書には、「授業で読んだものと似た本を作りたい」というコメントが複数見られた。このことから、様々なジャンルの多読教材が、学習者のoutputに影響を与えたことが分かる。多読の目的の1つは、教室外で自由読書が続いていく自律学習者の養成である。学習者が自発的にプロジェクトに取り組んだことは、その目的へのつながりを示していると言える。より多くの学習者の自律学習を促すためにも、多様な多読教材の作成・提供が望まれる。

## 「多読向けの読みもの：レベル別読みもの作成方法と市販本の選び方」(Books for extensive reading: How to write Japanese graded readers and how to choose from authentic books)

Kazuko Kawamoto, NPO TADOKU Supporters

本発表では、多読に必須の大量の本を提供するため、日本語のレベル別読みものを作成してきたNPO多言語多読として、レベル別読みもの作成の留意点、現状と課題、また、多読に適した日本語母語話者向け市販本の選び方について述べる。多読には、大量の本が必要である。それではどんな本を大量に読んだらいいか。NPO多言語多読では、量を確保するため、多読四原則に従って読むことを奨励している(栗野2012)。多読四原則とは、1.やさしいレベルから読む、2.辞書はひかない、3.わからないところは飛ばす、4.読み進めなくなったらやめる、である。したがって、この読み方が実現できる読みものが必要になる。ひとつの答えは、語彙と文法をレベル別にコントロールした日本語学習者向けのレベル別読みものである。しかし、自律した読者になるためにはレベル別読みものを読むだけでなく、レベルに応じて日本語母語話者向けの本も読むことが、日本語の幅を広げ、fluencyを獲得するために必要だと考える。初級向けには絵本、初中級以上にはアニメブックスや児童書やマンガがそれにあたる。本発表では、まず、NPO多言語多読が作成している「レベル別にほんご多読ライブラリー ほんごよむよむ文庫」(アスク出版)「JGRにほんご多読ブックス」を例に作成時の留意点について述べ、問題点、今後の課題とその解決策を考えたい。次に、日本語母語話者向けの本から何をどのように選んだらいいのか、実際の本を紹介しながら作成時の留意点をあげる。さらに、今後日本語多読を継続、発展させていくために、日本語教師全体で読みものの確保をめざすネットワーク作りなどを提案したい。

## 「読んで世界を広げよう -- 中上級向け読みプロジェクト」(Expand your world by reading: Reading project for mid-advanced learners)

Yoshimi Nagaya, Massachusetts Institute of Technology

大学の一般的な日本語コースでは、最初の1.2年間で基本的な文法構造を網羅する。基本文法を学習し終えた学習者が言語能力を向上させていくためには、学習対象の言語に触れる機会を増やし、語彙・表現を蓄積することが不可欠であるが、それを体現するのに、学習者が自分で読み物を選び、自分のペースで読み進める自主的な読み学習は、学習意欲を持続させる意味でも大きな効果がある。(白井2012, 高瀬2010)本発表では、基礎文法を終え、中上級へと移行する段階で試みた「読みプロジェクト」の実践報告とともに、読みプロジェクト施行のために本校で作成したウェブサイト「読み物コレクション」を紹介する。「読み物コレクション」は小説、新聞記事、詩、留学体験記など様々なジャンルの中・上級学習者向けの読み物を集めたオンラインサイトで、特に漢字文化圏以外の学習者が漢字や未習語彙に精神的負担を感じないよ

う、読み物には辞書機能がつけられている。学習者は必要に応じてテクノロジーを利用しながら読むことができる。発表者の担当した大学三年生のコースでは「とびら」を主な教科書として使用しているが、三年生後半のクラス外学習の一課題として、「読み物コレクション」の中から学習者が自分で読み物を選択し、各々のペースで読み進めるプロジェクトを試みた。教師は学習者との個人面談を通して、読み物についての質問に応じたり、議論をしたりすることで自律学習を支援する方法を取り入れた。この読みプロジェクトの意義、作業内容、学習者のフィードバック、教師側の改善点などを考察し共有することで、日本語学習者の自主的な読書の支援に関する議論が進むことを期待する。

## **SESSION 2-B: PEDAGOGY PAPERS [ COLUMBIA ROOM ]**

*Chair: Michiru Ichihara Lowe, Vanderbilt University*

### **「日本語教育でのテクノロジーの位置づけ」 (The place of technology in Japanese classrooms)**

**Kozue Miyama, Amherst College**

Bowen (2011, 2012)は、大学教育で、テクノロジーは授業の前後で有効活用し、授業時間はテクノロジーにはできない教師と学生の対話のために使うことを提案している。その対話の時間では学生を観察し、学生に今、何を伝えるべきかを判断していくことが教師の重要な役割になっていくと言う。本発表の主旨は、日本語教育でのテクノロジーの効果的な位置づけを考察することである。日本語教育で、教師と学生が対面する時にしかできないこと、そして、テクノロジーの特性を効果的に利用できることはどんなことだろうか。コミュニケーションを目的とする語学学習で、テクノロジーはどう位置づけられるのだろうか。学習者の間の個人差は日本語の初級クラスから見えてくる。そして、言語の習得度以外に、学習ストラテジーにも大きな差が見られる。日本語学習者の学習背景の多様化が進んでいる中で、個人差に対応するためのテクノロジーの位置づけを考えてみることは意義があるのではないだろうか。アマースト大学の日本語プログラムでは、個人差に対応し自立した学習者を育てるために、flipped classroomやblended learningの考えも取り入れて来た。そして、学生と教師の対話時間をどのように設定すると、一人一人の学習に今何が必要かを見極め、自立した学習を支援することがもっと可能になるのか、試行を続けている。本発表では、初級のコースの実践を元に、日本語教育で個人差への対応に取り組む中でテクノロジーの位置づけと教師の役割を考察したい。

### **「キャンパス内の『日本』を見つける-日本語学習を促進するためのGPSゲームの利用」 (Find "Japan" on campus: Promoting Japanese language learning through a GPS-based game)**

**Yumiko Tashiro, Washington and Lee University; Shinji Shimoura and Kazumi Hatasa, Purdue University**

本発表では、現在アメリカにある大学、約10校の協力を得て行っているFind Japan on campusのプロジェクトの成果、および今後の展望について報告を行う。Find Japan on campusとは、GPS機能を備えた位置情報ゲームシステムを用いて、学生が主体となってキャンパス内の日本と関係のある物や場所を見つけ、それを紹介する活動である。外国語として日本語を教える環境では日本語の使用がクラス内だけに限られることが多いが、キャンパス内の今まで気付かなかったようなところにも日本と関連のあるものが存在することを認識し、意識化することで、日本語や日本そのものをもっと身近に感じさせるという効果がある。学生はそれぞれ見つけた情報をスマホのアプリから日本語のテキスト、音声、写真といった違った形で投稿する。その情報は教師やクラスメートだけでなくアプリを使用する人であれば誰でも共有することができる。そして、その情報を元に新入生対象のオリエンテーションや高校生が大学訪問などを行う際にキャンパスを紹介するツールとして利用することも可能である。このプロジェクトは、日本語学習への動機付けを高めるだけでなく、学習者の学年を超えたプログラム全体の結びつきを強め、新しい学習者を取り込むきっかけにもなるであろう。また、同じキャンパス内の他の言語プログラムと協力すれば、多言語に渡る情報システムが構築され、外国語教育全体の活性化を促すことも可能である。現在のところ、個々のキャンパスで別々に行う活動ではあるが、他大学の状況を閲覧することは可能である。複数の大学キャンパスが情報を共有することによりさらなるコラボレーションへと発展させることも考えられる。

### **「身近なテクノロジーを利用した自己モニター音声教育の実践報告」 (Self-monitoring pronunciation activities using commonly-available technology)**

**Emi Yamanaka, Boston University**

発音、音声教育は、多くのクラスで指導に十分な時間を割くのが難しい一方、学習者たちの上達へのニーズは教師が思うより高いと言われる(佐藤1998、ほか)。その対処法の一つとして学習者に自らの発話を自己モニターさせる試みが数多く行われている(小河原1997、河野2011、ほか)。また、音声認識テクノロジーを駆使したフィードバックシステム開発も進んでいる(松崎他2012、ほか)が、ここでは身近で手軽に使えるウェブツール、フリーウェア、スマートフォン、音声入力機能等を使い、学習者が教室内外で行える発音、発話能力向上のための練習について報告したい。発音、発話の自己モニターについては、効果を認めるものも多いが、様々な複雑な要因がからみ一律ではない。学習者が作る発音基準の問題、学習者の動機による差、学習者の情意要因、演繹的、帰納的指導の是非、注釈・リハーサル等のストラテジーがどのレベルの学習者に効果的ななど、様々な示唆がされてきている。これらの結果をふまえ、身近なテクノロジーを使いレベル等に応じてどのような自己モニター活動の試みが可能かその例を紹介し、その結果を検証したい。

### **「動画インタビューサイトとマンガを活用した中上級授業ー学習者主体のピアラーニングの試み」 (An upper-intermediate class utilizing online video interviews and manga: A student-centered peer learning approach)**

**Michiru Ichihara Lowe, Vanderbilt University**

本発表は、人気マンガと動画インタビューサイトを使った創造的活動を通し、中上級日本語学習者の自律学習力の向上を図った授業の実践報告である。新しい試みの背景には、本学における中上級コース履修者の減少、上級クラスの相次ぐ閉講が一因としてある。全米規模では日本語上級コースの履修者数は安定しているようだ(MLA, 2013)が、本学では必須単位数取得完了や複数専攻者の必須単位増加などの要因で、学習の継続を止める学生が少なくない。そこで上級コースへ学習者の興味を持続させ主体的な学習者になることを目標とし、ピアラーニングを取り入れた中級クラスを開講した。ピアラーニングは仲間との対話を通し、学習者が相互に学びを引き出すもので、教師はその支援者だという考え(池田・館岡 2007)だ。学習者は主体性を持って協働的に課題を解決する事が求められる(神村2014)。このクラスでは、内容理解を自分の経験と照らし合わせ表現することをコースの中心に設定した。1)まず登場人物やストーリーと自分の共通項を見つけ出させ、2)それぞれの視点や経験に沿った意見を教室で発表し作品の解釈に貢献していくピアラーニング。3)次に、動画インタビューサイトを使い、マンガの登場人物としてモノローグの動画を作成しシェアする、また登場人物が現実世界へ来たたと仮定して物語の続きを作り発表し、4)最後に、互いに動画やプレゼンテーションを評価しあう、という流れを作った。今回の実践において、学習者主体のピアラーニングを通して学生たちが相互に刺激し合い作品と自分との関わりを開拓し、学習言語での創造的活動が可能になった。その過程について考察したい。

## SESSION 2-C: PEDAGOGY PAPERS [ BOREN ROOM ]

Chair: Jun Xu, University of Denver

### “Exploring a flipped classroom approach in a Japanese language classroom”

Yuko Prefume, Baylor University

A flipped classroom approach promotes active learning and increases teacher-student interactions by maximizing face-to-face class time (Hamdan, McKnight, Mcknight, Arfstrom, & Arfstrom, 2013). When it is applied to a foreign language classroom, it allows instructors to incorporate both the explicit instruction and interaction approaches, which may facilitate the understanding of grammar and lead to language proficiency. The present study explored the effect of a flipped classroom approach in a Japanese language classroom to assess its effectiveness and feasibility. A concurrent embedded strategy of mixed methods was utilized to study two sections of the introductory Japanese language courses at a private university in Texas. One section was the experimental group (EG) with 19 students. The other section was the control group (CG) with 20 students. In order to establish a baseline of the students' language skills, both sections were taught using a traditional lecture approach during the first half of the semester. A flipped classroom approach was implemented in the EG during the second half of the semester. Six types of instruments were utilized: (1) questionnaires, (2) measures of learning outcomes, (3) class observation, (4) oral production rating scale, (5) Blackboard statistics tracking, and (6) instructor's daily journal. The study found that a flipped classroom initially requires a significant time commitment to create lecture videos and preparation; however, delivering instruction outside of class with lecture videos increased active classroom learning time. While no statistically significant differences were found between the EG and the CG in the students' learning outcomes, descriptive analysis revealed learning gains in the EG. In addition, qualitative data revealed that students expressed favorable attitudes towards the flipped classroom approach.

### 「反転授業を用いた次世代型学習への取り組み」(Flipped classroom: Transforming the course for a new generation of teaching and learning)

Yoshie Kadowaki and Sayumi Suzuki, University of Nevada, Reno

近年ブレンド型学習の一形態として、反転授業が注目を集めている。反転授業とは、学習者が講義などの基本的な内容を授業前に自主学習し、授業時間は知識の定着や応用のための練習などに使用される教育方法であり、自主学習の過程を通してテクノロジーが使用されることも特徴の一つである。これと同時に、近年の大学においては、テクノロジーの存在が生活面だけでなく学習面においても不可欠であるGeneration YやZの学生がクラスの大半を占めるようになり、時代に合った授業の改革が必要になってきている。加えて、ネバダ大学リノ校では、授業時間に制限があり、ACTFLが提唱する21st Century Skills (Collaboration, Creativity and Innovation, Technology Literacyなど)育成のための活動が確保できておらず、総合的スキルの練習も不足していることが慢性的な課題となっていた。本学では、これらの課題解決を目的とし、反転授業のための教材開発、実践を行った。教材開発として、教師は文法項目学習のための講義ビデオと、各ビデオに基づく小テストを、オンライン学習ができる形で作成した。学生は毎日の授業の前に講義を予習し、小テストを受けた上で授業に臨んだ。実施の結果、授業時間を21st Century Skillsの練習に割く時間が大幅に増えたほか、教師側、学生側共にクラス内での日本語使用率が上がるなどといった効果があった。今回の発表ではこの取り組みについて実践報告を行うとともに、学習者の反応、今後の課題や将来性について考察したい。

### 「日本語発音指導の必要性に関する調査－学習者調査と教師調査の比較から見えてくるもの－」(Survey on the views and practices on Japanese pronunciation: Comparing students' and teachers' beliefs)

Mayu Miyamoto and Natsumi Suzuki, Purdue University

現在、多くの言語教育現場でコミュニケーションな教授法が実践されているが、その中で発音に重点を置いた口頭練習は少ない。発音も円滑なコミュニケーションには必要な要素であるにもかかわらず、時間的制約やシステム化した教材の不足などの理由で、体系的に導入されていないのが現状である(谷口, 1991; 柴田, 2015)。また、発音指導が重視されなくなった背景には、教師側の「intelligibleであれば良い」という考え方が暗黙的な指導方針になってしまっていることが挙げられる(Cenoz and Ma, 1999; MacDonald, 2002)。では、このような指導方針に対して、学習者の意見はどのようなのだろうか。JSLの学習者を対象に行った調査によると、学習者は「日本人のような発音を習得したい」といった目標を持っている

ということがわかった (Toda, 2007)。では、JFLの環境においても同じことが言えるのだろうか。教師側と学習者の考え方に不一致があるとすれば、学習者のニーズに応えていないばかりか、向上心をそぐ結果になってしまうことが危惧される。そこで今回、JFLの環境にいる教師と学習者両方の発音学習に対する考え方を明らかにすべく、アンケート調査を行った。本調査は、発表者らが所属する機関において日本語を履修している全ての学年の学習者とそれを教えている教師を対象に行った。学習者対象のアンケートの内容は、発音に関する目標、学習意欲、授業の一環として発音指導を取り入れてほしいか、などの質問を組み込んだ。教師対象のアンケートには、発音指導の必要性、発音指導を授業に取り入れているかなどについての質問を含めた。本発表では、調査で得た結果をもとに、今後の日本語発音指導のあり方について考察してゆく。

**「初級日本語における終助詞「よ」の指導について –『げんき 1』を例に–」(Teaching the sentence-final particle 'yo' in elementary Japanese: Using "Genki I" examples)**

**Jun Xu and Yuki Arita, University of Denver; Hironori Nishi, University of Iowa**

終助詞「よ」は多くの初級教科書において早い段階で導入されるが、初めの導入以降、長期にわたってその多様な機能についての指導は行われていないのが現状である。また「よ」の説明に関しては、聞き手が知らない情報を伝達するという説明に留まり、なぜ相手が知らない情報を「よ」を伴って伝達する必要があるのか、「よ」を使う文脈はどんなものか、「よ」の語調の違いと発話意図との関係性はどうか、といった説明が足りない。さらに、西川 (2000) も指摘するように、日本語学習者は母語話者と比べて「よ」の使用が少なく、その使用範囲も非常に限られている。これは「よ」の使用が聞き手に考えを「押し付ける感じ」を持つため、特に目上の人への使用は適当ではない、という初級レベルにおける「よ」の指導がその一因だと考えられる。本研究では、教科書「げんき 1」の会話文の中の「よ」18例を、付属 CDによって上昇調か下降調かに基づき分類した。その結果、上昇調の「よ」が16例で大半を占め、下降調の使用が少ない事が分かった。また、上昇調の場合は聞き手の間違った認識を訂正するか、聞き手に何らかの提案を行う場合に使われていることが明らかになった。一方、下降調の「よ」は、聞き手への配慮を示す状況で使われ、その使用は義務的ではない事も判明した。この結果を踏まえ、本研究は、初級日本語における「よ」の指導は、1) 「よ」が使用される文脈を学習者と共に分析する授業活動を行い、2) 英訳との比較も通して、3) 「よ」の認識訂正、聞き手への働きかけ、聞き手への配慮という異なる機能を提示しつつ、4) 語調の影響も指摘した上で、5) 継続的に行われるべきだということを提案する。

**SESSION 2-D: SECOND LANGUAGE ACQUISITION (SLA) PAPERS [JEFFERSON ROOM]**

**Chair: Mariko Wei, Purdue University**

**「第二言語学習者におけるアクセント習得—認知的要因とアクセントタイプの検討—」(Acquisition of L2 lexical accent: Examination of cognitive factors and accentual patterns)**

**Yukiko Hatasa, Hiroshima University; Eriko Takahashi, Mejiro University**

発音は母語話者にとって第二言語学習者を評価する最も簡易な材料であり、発音が悪いと、文法的であっても、失礼な印象を与えたり、能力が低いと評価されうる(土岐 1994, 李 2002)。日本語母語話者は個々の音声よりもアクセントに注意をする傾向がある(佐藤, 1995)。これまでのアクセント習得研究では、音韻知識(松崎, 2008; 磯村, 1996)、音韻知覚(鮎澤, 1998; 2003)、自己の発音を内在基準と比較するモニター力(小河原, 1997)などの検討がなされてきた。しかし、先行研究はこれらの一部を扱うか、ごく限られた音声提供者の発話を基にした研究が中心で、総合的な検討は不足している。そこで、本研究では、アメリカ人日本語学習者35名を対象に有意義語と無意味語のモニター、アクセントの弁別、アクセント知識、音韻短期記憶課題を試行し、有意義語の音読課題の成績との関係を分析した。さらに、アクセント産出が母語の影響を受けるか否かを、有意義語音読課題のアクセント型をもとに分析した。その結果、語彙アクセント知識やモニター力は正確な語彙アクセントの産出に関与する一方、アクセントの知覚能力と音韻短期記憶は産出との関連性が低かった。また、アクセント型での比較では、母語の正の転移により易しくなると想定される中高型の成績よりも頭高型の成績が有意に高かった。このことから、日本語のアクセントは聞き分けられれば習得できるというものではなく、アクセントに関する正しい知識と、自分の発音と正確な発音との違いに対する認知力が重要であること、母語の影響よりも音の高低パターンの明瞭さが関与することが分かった。

**“Perceptions of the Japanese imperfective aspect marker 'teiru' among native speakers and L2 learners of Japanese”**

**Yoshiyuki Hara, University of Oregon**

There have been debates, among Japanese linguists, on how to define and categorize meanings expressed by the Japanese imperfective aspect marker, -teiru. In the second language literature, the acquisition of -teiru by L2 Japanese learners has been examined and compared against the assumed native norm as the baseline. However, the remaining ambiguity of the meanings of -teiru makes the interpretation of L2 data difficult. This present study, therefore, investigated categorization of -teiru meanings among native Japanese speakers (n = 15) by using a judgment test and compared the results with the expected categorizations (progressive vs resultative) based on the previous literature. This study further investigated the judgment among intermediate-level English speaking learners of Japanese and compared the results with those of Japanese native speakers. The judgment test contained three types of sentences (S+V, “already” + S + V, and S + truncated V) with one of the three types of verbs (activity, accomplishment, and achievement). The results showed that the judgment of those native speakers was overall consistent with the previous literature with some noteworthy exceptions. In addition, when stimulus sentences contained a word, *sudeni* “already,” accomplishment verbs and even activity verbs with -teiru form (which were judged as progressive state in plain sentences) were more likely to be judged as resultative state. Furthermore, truncated verb form, -teru, which is rather a default form in oral conversations, seemed to increase the sense of resultative state. The results of

Japanese L2 learners will then be compared to see how and in which conditions their perceptions differ from native speakers and to what extent their perceptions become closer to the native pattern as their proficiency level advances. Pedagogical implications will also be discussed.

### **“Pedagogical mediation for game-mediated Japanese learning”**

**Kayo Shintaku**, University of Arizona

Multiliteracies (New London Group, 1996) and new literacies (Lankshear & Knobel, 2006) have been emphasized in foreign language (FL) education, and as one of the tools to implement the concepts, digital games have been actively discussed and studied in FL pedagogy to enhance language learning (Thorne, Black, & Sykes, 2009; Reinders, 2012; Sykes & Reinhardt, 2012). In digital gameplay, meaning emerges through the interaction of game rules and designed narratives (Juul, 2005; Calleja, 2007), as players integrate game text, visuals, and actions. Playing a game in an L2 involves comprehending the language of the game rules as well as the language of a fictional world that narrativizes the rules. Without pedagogical mediation targeting areas of functional overlap, games meant for L1 users may induce cognitive overload in FL learners (deHaan, Reed, & Kuwada, 2010). This presentation explores the role of pedagogical mediation in game-mediated FL learning with vernacular games, through the results of two studies conducted for the learners of Japanese as a FL at a U.S. university. The first (47 first-semester learners) and the second (9 fourth-semester learners) studies used two types of online vernacular games (not educational) designed for L1 users of Japanese. Supplemental materials were created to target learning, with the hypothesis that learning would occur most readily when instruction focused on language and cultural items key to both game rules and narratives. The results implicate the role and careful design of supplemental materials to guide the FL learners' attention and imply that this intervention is necessary to enhance FL learning through the use of authentic, vernacular digital games. After the summary of the results and implications, instructional design on how to integrate game-mediated FL learning and future research directions are discussed.

### **“Teaching reading to English-Japanese bilingual children with autism spectrum disorder”**

**Mariko Wei**, Purdue University

Diagnoses of Autism Spectrum Disorder (ASD) have soared to as many as one in every 68 children in the United States (Centers for Disease Control and Prevention in 2014). While children without ASD acquire their first language (L1) through immersion, autistic children face various challenges in acquiring languages and typically need speech therapy support. Among all the linguistic impairments, reading comprehension is especially difficult for individuals with ASD. They generally demonstrate well-developed word recognition skills, but their reading comprehension is severely impaired (Nation et al., 2006). It is because people with ASD have difficulty shifting their attention from word-level reading to text comprehension. Compared to their decoding skills, other necessary skills for reading such as text integration, metacognitive monitoring, inference making, and working memory are under developed. The present study examined possible effects of three instructional techniques on reading comprehension skill of English-Japanese bilingual children with ASD. Fifteen subjects participated in the study: five English-Japanese bilingual children with ASD, five Japanese monolingual children with ASD, and five Japanese monolingual children without ASD. The subjects read passages under four conditions: explicit vocabulary instruction, answering pre-reading questions, completing cloze sentences embedded in the text, and control (reading only). A repeated measures analysis of variance indicated that conditions differed significantly in their effects of reading comprehension, but all three reading instructional interventions had significant effects. However, the Japanese monolingual children without ASD outperformed the other two while there was no significant difference between the English-Japanese bilingual children with ASD and the Japanese monolingual children with ASD. Instructional implication for text preparation and remedial instruction for Japanese learners with diverse needs will be discussed.

## **SESSION 2-E: LINGUISTICS PANEL [ UNIVERSITY ROOM ]**

*Chair: Fumiko Nazikian*, Columbia University

### **Panel Title: 「文末表現の言語学的考察」 (Study on Sentence-Final Expressions in Japanese)**

**Panel Abstract:** 日本語の文末表現は、命題や聞き手（または読み手）に対する話し手（または書き手）の様々な態度を表すという大切な機能を持つ。しかし、その分析はまだ未開拓、未解決の点が多い。このパネルでは様々な視点から文末表現の語用論的機能、さらには話者間の相互行為における機能を解明することを目的とする。パネリスト1は、「Sということ」に注目し、これが「Sということだ」（＝Sという意味だ）のテ形でない場合は、「で」は格助詞、「こと」は一群の普通名詞の代用詞であること、そして、「という」を挿入することで、意味の限られた文法化表現「Sことで」（手段、原因・理由）から外れ、広範な意味を表せることを明らかにする。また「ということ」には配慮表現機能もあることを示す。パネリスト2は、「の」の疑問文「Xノ？」について調べ、「話し手の情報Xに対する前提」という観点から同表現が使われる3つの場合を考察する。特に「話者が新たにわかった情報を報道価値のある(newsworthy)ものとして提示するという機能」に注目し、さらにその談話機能を明らかにする。パネリスト3は、大学生と教授との会話を分析し、「オプショナル」ネの使用により学生の発話の丁寧度が下がることを指摘し、その理由を説明する。パネリスト4は、終助詞「よね」と「でしょう」の確認機能に注目し、Mr. O Corpusの中で両者の確認機能がどのような相互行為機能を持つかを比較し、その違いを説明する。

### 「トイウコトデについての一考察」 (A Study on 'to iu koto de')

Michio Tsutsui, University of Washington

本発表は、トイウコトデをめぐる文法現象を考察しつつ、これがどのような場面で使われ、どのような意味を伝え、どのような機能を持つかを論じる。「XトイウN」は一般に、「犬という動物」「理恵が結婚するという噂」のように、Xが普通名詞Nの具体物や具体的内容を表すという意味構造を持つ。つまり、トイウの一つの機能はこのような関係を示すことにある。また、「SトイウN」については、大島(2010)、丹羽(2012)など多くの研究があり、Nが「噂」「仕事」のように明確な指示対象を持つ名詞の場合、どのような時にトイウが出現するかを論じている。しかし、コトは指示対象が漠然としているため、このような従来の理解ではトイウコトを十分に説明できない。本研究は、コーパスデータの調査から、トイウコトデを次のように分析する。1. トイウコトデのコトは普通名詞（実情、条件、考え、方針など）の代用詞である。コトが使われるのは、何らかの理由で特定の言葉を避けたいか、特定の言葉を選びにくいとため、事実、コーパスでは対応語が特定しにくいケースが多く見られる。2. デは格助詞とダのテ形の二種類があり、前者は概ね「～でもって」の意味、後者は「Xトイウコトダ」の非終止形を表す。3. 「Sコトデ」は文法化されており、特定の意味（＝手段、原因、理由）しか表現できないが、トイウを挿入することでこの文法化から外れ、より広範な意味の付与を可能にする。この他、発表では、トイウの先行要素の統語的自由度が大きいことや、コトやデの曖昧性から、トイウコトデが広い場面で使われること、さらに、これが直接表現を避ける配慮の機能を持つことも論じる。

### 「の」真偽疑問文に関する一考察」 (Some observations on Japanese yes-no questions marked by 'no')

Naomi McGloin, University of Wisconsin, Madison; Yan Wang, Carthage College

命題の真偽を問う疑問文の一つに文末に「んですか」または「の」を伴う形式がある。従来この形の疑問文は、ある状況に関する説明を求めると言われている。しかし、説明説にあてはまらない場合も数多い。また早野(2013)では、「の」疑問文を使う時話者は質問に含まれる命題が不可能、意外、期待に反すると考え、相手から肯定的な返事が返ってくることを期待していないと論じている。確かに「このタオル使ってもいいの？」のような例は「このタオル使ってもいい？」と比べると、話者の命題に対する懐疑心を表しているように思われる。しかし、スペイン語を話すルームメイトを探していると相手から聞いた人が相手に「スペイン語習ってるの？」という場合には特に懐疑心は見られない。本研究では実際の会話資料に基づいて、通常の「の」疑問文には次の三つのタイプがあると分析する。まず、ある状況なり相手の発話に基づいて<X>という推測をして、「Xの？」という場合。次に、ある状況から<not X>という推測をして「Xの？」という場合。そして第三に、<X>が事実だとわかった状況で「Xの？」という場合である。第三の例としては、相手から「シカゴに三回行った」と聞いた話者が「三回も行ったの？」と言う場合があげられる。特に第三の場合には、話者が新たにわかった情報を報道価値のある (newsworthy) ものとして提示するという機能があり、しばしば驚きを伴い、さらに談話を進展させる働きがある。また、早野の言う懐疑的態度が感じられるのは第二の場合で、この否定的態度は話者の持つ前提から生まれてくるものであり、「の」疑問文の根本的な機能ではないと論じる。

### 「終助詞ネのオプショナル用法：ポライトネスの観点から」 (An analysis of "optional ne" from a politeness perspective)

Mutsuko Endo Hudson, Michigan State University

終助詞ネは長年多角的に研究が重ねられ、確認・同意要求の機能が一般的に認められている。情報の観点からは話者と聞き手の共有情報を表し (Kamio 1990、大曾2005)、情意面では、ラポート (Uyeno 1971)、引き込み・親愛・親しみ・和らげ (Martin 1975) などを表すとされる。この他、Kamio (1998) は「そのミカンはいくらですか」「500円ですネ」のようなネの使用を「オプショナルのネ」と分析している。相手からの質問に対し考えを巡らした後の返答に現れるのが典型的で、話者が当該情報を一方的に所持しており、聞き手は共有していない。本研究ではオプショナルのネをポライトネスの観点から分析する。データとしては主に日本の大学生と教授 (筆者) との会話 (計8.6時間) を使う。(1) 教授：じゃあ、えっと、専攻は？ 学生1：専攻は日本語教育ですネ。(2) 教授：フランス語の先生ってフランス語の母語話者ですか？ 学生2：日本人ですネ。この種のネは確認・同意要求はせず、引き込み・和らげなども表さない。のみならず、他人事を話しているような、延いては「ぶっきらぼうな」印象を与えかねない。これは、自分の一方的な情報を恰も相手が共有していて当然であるかのように提示することが原因なのではないかと考えられる。「ポライトネスの研究は1970年代からなされているが、インボライトネスの研究はつい最近始まった」 (Locher 2011) と言われており、日本語におけるインボライトネス研究は更に遅れを取っている。このようなネの特殊な含意は日本語教科書では触れられていないが、学習者に伝える必要があるのではなからうか。

### 「よね」と「でしょう」の確認機能の比較：談話機能と相互関係機能について」 (A comparative analysis of 'yone' and 'deshoo': From the point of view of discourse and interactional functions)

Fumiko Nazikian, Columbia University

本発表は「よね」と「でしょう」の談話における確認機能に焦点をあて、Mr. O Corpus使い、その違いについて説明を試みる。「よね」も「でしょ(う)」も確認機能、すなわち、相手から同意、確認応答を求める機能があるが (Hayashi 2010)、両者がどのようなコンテクストで使用されるか、話者と聞き手の情報に対する関わり方においてどのように異なるかなど、まだ、説明が十分とは言えない。「よね」と「でしょう」は確認機能において、例 (1) のようにどちらも可能な場合もある。(1) あそこに白い建物がみえる {よね/でしょ}。これに対し、どちらかのみが可能か、または、どちらも不適切な場合もある。(2) (映画から帰ってきた相手を見て感想を聞く) 映画、どうだった？ 結構おもしろかった {\*よね/でしょ}。(3) (オフィスを出る時、鍵をかけたかどうか不安になり、同僚に確認する) 私、鍵、かけた {よね/\*でしょ}。どうだったっけ。(4) (ウェ이터が注文を繰り返す) チキンカレーが一つ、ビーフカレー、一つ、それからビ

ール、2本{\*ですよ/\*でしょ}。本研究では、Kato (2012), Hayano (2012), McGloin & Xu (2014)などの研究に基づき、「よね」と「でしょう」の確認機能には以下のような違いがあることを明らかにする。1) 「よね」は話し手が自分の判断、評価を主張する一方、それに対して相手の同意／不同意のどちらもあり得ると思っている話し手の態度を表す。2) 「でしょう」は相手がおそらく同意するであろうという推測のもとに確認をするため、同意しない可能性をも認めている場合には使われない。3) 「よね」は話者の確信が弱い場合でも強いでも使われるのに対し、「でしょう」は確信が弱い場合には使われない。

## SESSION 2-F: LITERATURE PAPERS [ VIRGINIA ROOM ]

Chair: Miyabi Yamamoto, Independent scholar

### “Railways and the formation of the nation-state in modern Japanese literature”

Jing Wang, University of Toronto

Railway is one of the most dramatic technological inventions in the 19th century. It not only integrate distant regions into consolidated nations but also transformed popular perceptions of time, space and body. In this paper, by reading the depictions of railways in modern Japanese literature, I will explore the relations between railways and Japan's transformation into a modern, imperial nation during the Meiji and Taisho eras. After the opening of first railway line between Tokyo and Yokohama in 1872, Meiji elites looked to railways as a powerful vehicle for forming a modern nation. On one hand, as Tokyo was located at the physical and conceptual center of an integrated railway network, the rails that crossed provincial boundaries altered people's sense of belonging that had been restricted to local geographic and political units. On the other hand, Japanese rails also redefined national boundaries through facilitating new settlement and exploitation of resources in occupied continental Asia. As railways became a vital issue for the modernizing Japan, writers like Natsume Soseki responded to the huge influences of development of rails on the individual body and the Japanese nation-state. Many of them began to frequently portray experiences of train mobility. Their works address not only travels in inner-city streetcars and inland rails, but also Japan's expansionism on the Asian continent where trains played an integral part. Through reading those textual depictions of rails, this paper will discuss how the trains and railway networks traversed boundaries and mapped the contours of modern Japan.

### “Spiritual Recovery in Yoshimoto Banana: From Kitchen to Honeymoon”

Yuko Ogawa, Purdue University

Yoshimoto Banana made her debut with *Kitchen* in 1987 at the peak of Japan's economic bubble. Her first story immediately became a hit by dealing with the theme of healing. In *Kitchen*, which became the prototype for the author's approach to spiritual issues, the protagonist discovers blessing moments in her everyday reality that inspires the encouragement of her recovery. In the 90s, Japan entered the gloomy period and has experienced economic recession followed by the Great Hanshin Earthquake and Tokyo subway gas attack. The author published *Honeymoon* in 1997, and dealt with the same theme of healing as *Kitchen*. However, the author's way of dealing with spiritual issues has changed, and the protagonist's recovery process is shown differently. For the protagonist's spiritual recovery in *Honeymoon*, the author evaluates transcendental power rather than appreciating everyday reality. The protagonist in *Honeymoon* regains energy by traveling and experiencing nature. The story emphasizes the importance of being out of everyday reality and connecting with nature. But in regard to being out of everyday reality, the author carefully deals with her spiritualism and makes a clear distinction for the two kinds of transcendental power. Religion and nature worship are both represented as something beyond everyday reality. The protagonist recovers from loneliness and from a sense of guilt for being the son whose father pursues a homicidal religion in California by coming in contact with Mother Nature that blesses all lives equally. The author, who witnessed Aum's indiscriminate murder two years before the publication of *Honeymoon*, separates the new religion from animistic practices as a means for the protagonist's spiritual recovery. Thus, with gratitude for animistic powers through traveling, the protagonist in *Honeymoon* accomplishes his spiritual recovery. I closely examine the protagonist's process of spiritual recovery in *Honeymoon* by comparing it to *Kitchen*.

### “Challenging ideals of romance in Japanese girls' comics”

Miyabi Yamamoto, Independent scholar

Japanese girls' comics (shōjo manga) are well known for their emphasis on romantic relationships. Shōjo manga are also known for the large and visible number of socially marginalized characters who have populated them since the 1970s. One of the ways in which shōjo manga portray such characters as sympathetic figures with whom the readers can identify, thereby humanizing them, is by depicting their romantic experiences. Some of these portrayals remain problematic since conditions under which the marginalized characters are accepted are that their romantic experiences remain “normal” and recognizable, therefore, erasing their differences. Some others have portrayed these types of romances as rarified ideal forms lacking any sense of reality. In more recent years, younger manga artists have started changing the landscape of normative romance as exemplified in the manga of Yamashita Tomoko (1981-) and Kanno Aya (1980-). Yamashita started in the shōjo manga sub-genre, Boys' Love, focusing on male-male romance, but now publishes in multiple outlets including magazines for men. In her manga, she frequently treats non-normative romantic couplings and the details of the psychological challenges that the characters face for their choices. Kanno publishes for the mainstream alternative manga publisher Hakusen-sha and is best known for her aggressively gender-bending manga, Otomen (2006-2013). Through examining a series of these two artists' works, I discuss how Yamashita and Kanno challenge and change the normative romantic narrative in shōjo manga.

### “Abstinence makes the heart grow fonder”

Luciana Sanga, Stanford University

It is understood from the beginning of Murakami Haruki's tragic love story, *Norwegian Wood*, that—spoiler alert—the girl dies at the end. This paper shows that the origins of this plot device can be traced to stories from high school textbooks that eschew sex by killing off the girl, a plot device that was supposed to promote abstinence and develop the man's character. However, Murakami's twist is that neither objective is achieved: The lovers have sex before the girl dies and the man remains mired in adolescent angst. The triumph of *Norwegian Wood* therefore lies in rejecting moralist propaganda and bringing sex back into the conversation, while the tragedy of *Norwegian Wood* is not that the girl dies, but that the man fails to move on.

**12:30 a.m.-1:30 p.m. — Lunch Break**

**1:30 p.m.-3:10 p.m. — Session 3**

### **SESSION 3-A: PEDAGOGY PANEL [ SENECA ROOM ]**

*Chair: Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego*

**Panel Title: 「ソーシャルネットワーキングアプローチ (SNA) : グローバル社会とつながるための言語教育」  
(Social Networking Approach: Language Education to Connect to Global Society)**

**Panel Abstract:** インターネットの普及と共にグローバル化が急速にすすむ現代社会。このような時代においてはローカル、グローバル社会とつながるためのコミュニケーション能力が求められ、それに伴って言語教育が果たす役割も変化する。當作 (2013) が提唱するソーシャルネットワーキングアプローチ(以下SNA)は、時代が要求する総合的な能力の育成を目指した言語教育で、これまでの文法・語彙が「わかる」、それらを使い意思疎通、意思伝達が「できる」言語教育から、さらに言語を通じて多様な人、モノ、社会、文化と「つながる」ことにより新しい社会を創出することを言語教育の目標の一つとした。本パネルでは、このSNAの理論的背景とそれに基づいた日本語教育の実践例について紹介する。発表1では、SNAの理論的背景を議論するとともにSNAをどのように実践し、「わかる」「できる」「つながる」能力を伸ばすか具体的な日本語のクラス活動を紹介し、SNAによる言語教育の可能性を示す。発表2では、日本の大学でビジネスを学ぶアジア人留学生が日本人と協働でフィールドワークを行った結果、日本語とコミュニケーションスキル・社会力がどのように伸びたかを検討する。発表3では、ソーシャルメディアによる文化および談話構造の社会化に焦点をあて日米の学生の3か月間に渡る交流と協働で行った問題発見解決のためのメディアリテラシー活動の意義と成果を報告する。発表4では、メディアリテラシーの獲得とマルチモードの表現体を駆使したデザイン力の育成を目指し、留学生と日本人学生が「国際人」の概念を協働構築したプロセスを分析し、そこで育成されるデザイン力について考える。

**「ソーシャルネットワーキングアプローチ: 人、モノ、情報、社会、文化をつなぐ言語教育」 (Social networking approach: Language education to connect people, things, information, societies, and cultures)  
Yasu-Hiko Tohsaku, University of California, San Diego**

21世紀に入り、テクノロジー、特にインターネット技術が急速に発達し、私たちのコミュニケーションの方法も変化してきただけでなく、それが社会の変化を誘発し、社会において言語が果たす役割も変化してきた。言語の諸相が変われば当然のことながら、言語教育のアプローチも変化が要求される。ソーシャルネットワーキングアプローチ(以下、SNA)は、これまでの文法・語彙が「わかる」、それらを使い意思疎通、意思伝達が「できる」言語教育から、さらに、言語を使い、多様な人、モノ、社会、文化と「つながる」ことにより社会を変えたり新しい社会を創出することを言語教育の目標の一つとした言語教育のアプローチである。言語を使い社会実践をする言語能力の開発のためには、言語教育の基本である文法、語彙、音声の知識のみならず、文化能力、さらには、協働力、問題解決能力、創造力、高度の思考能力、異文化理解などいわゆる社会力が不可欠であるし、21世紀においては、テクノロジー、情報、メディアのリテラシーも必要である。また、グローバル社会、ローカルの社会がどのような問題を抱えているかの知識も要求される。SNAは、このような能力、知識、資質を総合的に開発し、実世界の人、モノ、情報、文化、言語の教科以外の教科内容などのつながりを通して言語を使っての社会実践能力を伸ばすことを目指した言語教育アプローチである。この発表では、SNAの理論的背景を議論するとともに、SNAをどのように実践し、「わかる」、「できる」、「つながる」能力、言語能力、文化能力、社会力を伸ばすか具体的な日本語のクラス活動を紹介し、SNAによる言語教育の可能性を示す。

**「SNAの視点からみた留学生の「つながる」社会力の育成プロセス」 (The process of learning social skills for connecting to the real world from the perspective of social networking approach)  
Hideko Shimizu and Naruhiko Shiratori, Kaetsu University**

本発表の目的は東京の某大学でビジネスを学ぶ留学生20名の日本語とコミュニケーションスキル・社会力の学びと成長について、SNA (當作, 2013)の枠組みを基に調査し考察することである。SNAとは「つながる」能力、社会力を開発し、言語を使って実際に社会活動をし、「つながる」学習活動を行うアプローチである。留学生は日本語力のみならず、日本で生きる社会力も育成する必要がある。そこで、留学生のために基礎ゼミナールを実施した。協働作業をするための能力や社

会力を育成し、大学時、大学卒業時にどのようなキャリアを描くかを指導するために、大学内や大学外でグループワークとフィールドワークを行った。大学内では同学年と先輩と活動を行い、大学外では企業メンバーと活動を行った。授業の前半では教室で、ロジカルシンキング、傾聴スキル等を学習させ、後半は学外でのビジネスの実践を通して、自律学習、協働力、問題解決力を養成した。研究課題はSNAの提唱する「つながる」、日本語学習、問題解決、協働作業、自律学習、異文化理解などの学びのプロセスを考察することである。研究法はミックスデザインを採用し、質的・量的データを分析した。データ収集方法は①授業や教室外活動に参加し、彼らの行動を観察した。②6人の学生を抽出し、2回インタビューを行った。統計的データとして③ジェネリックスキルとキーコンピテンシーを測定する客観的テストをプレ・ポストテストとして行い、推移を分析した。④日本語力テストの結果⑤学期末に授業や体験に関するアンケートを行った。これらのデータの結果を分析、考察を発表する。

**「ソーシャルメディアによる言語の社会化と日本語談話表現の習得」 (Language socialization through social media and the acquisition of discourse expressions)**  
**Yuki Matsuda, University of Memphis**

近年、社会実践を重んじた外国語教育が注目を集めている（當作2013）。社会とつながることで学習者が対象コミュニティの文化や言語を「社会化」するというのだ（Schieffelin & Ochs 1986, Lave & Wenger 1991）。言語を社会化することで対象コミュニティの文化的価値観とその指標としての談話表現を習得しながら、さまざまな社会活動を進行していくことができるようになることとされている。例えばCook（2008）は日本語学習者がホストファミリーとの親密な会話の中で社会的役割やアイデンティティを示す指標として文末表現を丁寧体からシフトするケースを紹介している。このような言語教育理論を踏まえ、本発表では、まだ先行研究が少ないソーシャルメディアによる言語の社会化に焦点をあてる。Web2.0以降、話すモードと書くモードの境がなくなり、さらに写真や動画など直接接点場面に以上マルチなモードでユーザー同士が意味交流を行うことができるようになった。このような新メディアを通じたコミュニケーションで英語圏の学習者が外国語である日本語をどのように社会化するかを検証するために、日米の学生がソーシャルメディアを通じて3か月間交流し、最後に協働で日本人訪問者に提供するためのウェブコンテンツを制作するプロセスを観察した。その結果、基準から外れた文字表記の操作（岡本2008）や文末表現を社会的な意味や自分の役割、また親しみを表す指標として主体的に使う例がいくつか観察された。この結果をもとに、言語・文化の社会化をより促進するデジタル時代のメディア・リテラシー活動について今後の展望を検討したい。

**「社会を組み替え、構築するデザイン力の育成」 (The ability to design and construct society)**  
**Noriko Okamoto, Tokyo International University**

世界的な人の移動と共に、日々膨大な量の情報が世界を駆け巡り、その勢いは留まることを知らない。同時に、インターネットの急速な発展を契機に近年のSNSの急速な広がり、音声、動画など、マルチモードの意味表現体の相互作用を通して、時間と空間を越えた異なる文化社会の人々との繋がりを可能にしている。コミュニケーション能力の育成を自明としてきた外国語教育現場において、このようなデジタルメディア時代に求められることばの力とは何か。それは、単語の意味や言語形式を理解し、規範に従って言語運用する「円滑なコミュニケーション能力」ではなく、異なる意見のぶつかり合いを乗り越え、時には、規範をズラす事によって、協働で意味を構築し、新たな価値を創り出し、社会を組み変えていくメディアリテラシーの獲得と、マルチモードの表現体を駆使したデザイン力であろう。本発表では、先述のデザイン力の育成を目指して行なった留学生と日本人学生の実践活動を紹介する。まず、本学が掲げる「真の国際人の育成」という建学の精神について、HP、車内広告等の大学紹介メディアにおけるマルチモードの意味表現体に注目し、批判的談話分析（CDA：Fairclough1989）の手法によりそこに埋め込まれている「国際人」について考察する。その上で、各自が目指す「国際人」とは何かを話し合い、マルチリテラシーのデザイン過程(The New London Group 2000)を通して、協働で既存メディアを再デザインし、新たな「国際人」の概念を協働構築し、そこで育成されるデザイン力について考える。

**SESSION 3-B: PEDAGOGY PAPERS [ COLUMBIA ROOM ]**

**Chair: Junko Tokuda, University of California, San Diego**

**「構想（プランニング）の作文への影響」 (Effects of planning on second language writing)**  
**Tomoko Okuno and Ayaka Sogabe, University of Michigan**

近年では、第二言語における口頭産出時の構想（プランニング）の重要性に関して多くの調査が行われ、1）前作業は流暢さと複雑さの向上に貢献するが、正確さの向上には効果がなく、2）前作業のタスクタイプとその実施状況、産出作文の評価方法、学習者自身の第二言語の熟達度が構想に影響を及ぼす（Ortega, 1999他）ことが明らかになっている。しかし、構想が産出作文の正確さ、流暢さ、複雑さに及ぼす影響については、あまり調査が行われておらず、そのほとんどが英語学習者を対象としたものである(e.g., Ellis & Yuan, 2004; Ojima 2006; and Ong & Zhang, 2010)。本研究では、米国内の夏季集中講座に参加した初級後半の学習者18名を三つのグループに分け、各グループに異なる前作業を与えた後、叙述文を書かせ、前作業のタスクが作文産出における正確さ、流暢さ、複雑さに及ぼす影響をEllis and Yuan (2004)の方法を用い調査した。その結果、英語学習者を対象としたEllis and Yuan (2004)の調査の結果と同じく、時間制限なしで、作文を書きながら構想する「オンラインプランニング」を行ったグループの作文の流暢さは、前作業なしの学習者より高かったが、正確さと複雑さに関しては、グループ間の有意差が見られなかった。一方、前作業を行ったグループの産出作文は流暢さ、正確さ、複雑さのいずれにおいても他グループとの有意差が見られなかった。本発表では、調査結果に加えて、作文の内容や構成についても分析・考察し、学習者の作文内容の充実に貢献し得る前作業の可能性についても示唆したい。

### 「中級学習者の作文におけるピア・ラーニング」(Peer learning in intermediate learners' writing tasks)

Hiromi Uchida, University of Hawaii, Manoa

日本語教育における言語教育観は時代と共に変化し、近年では「学び手が自らを発見するために日本語を使い、日本語を自律的に学ぶことができるように支援する」という「学習者主体」の考え方に移行し(池田・館岡2007)、ピア・ラーニングの重要性が指摘されている。ピア・ラーニングの一つにピア・レスポンスがある。これは「作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを書き手と読み手の立場を交代しながら検討する活動のこと」(池田・館岡2007)である。従来の作文では、読み手もフィードバックを与えるのも教師だが、ピア・レスポンスでは、作文の読み手は他の学習者であり、書き手は読み手に伝えたいことを書く。そのため、学習者は作文を「評価の対象」ではなく、自分を表現する「コミュニケーションの手段」と考えることができる。読み手はコミュニケーションの受け手として、書き手の意図を理解し、改善のためのフィードバックやコメントを与える。このプロセスで、書き手は自分の作文がどのように読まれるのかを知り、作文の改善の手がかりを掴むことができる。また、読み手も、他の学習者の考え方に触れ、推敲活動に協力することにより、自分の作文の改善の手がかりを掴むことができるのである。本プロジェクトは日本語の4年生のクラスを対象に、(1) 学生が他の学生からのフィードバックにどのような意見を持っているのか、(2) 学生が実際にどのようなフィードバックを与えるのか、(3) ピア・レスポンスにより、作文がどのように変化したかという質問を中心に、ピア・レスポンスが実際にどのように行われるのかを調査、分析する。

### 「インタラクションから見る日本語ペア作文の効果」(Collaborative writing activities in the JFL classroom: Product, process, and students' reflections)

Yuta Mori, University of Michigan, Ann Arbor; Mayumi Hirano, University of Nevada, Las Vegas; Megumu Tamura

通常、言語のクラスで行われるペア活動は「話す」活動が主であり、言語学習をより効果的に進めるための研究が、様々な言語や学習環境で行われている。しかし、ペアで1つのまとまった文章を「書く」活動の効用を調べた研究はまだ少ない(Storch & Wigglesworth, 2007)。Storchが行った一連の研究(1999, 2002, 2005)により、英語学習では、ペアで書いた作文は個人で書いた作文と比べ、正確さは上がるが、文の複雑さや長さには有意差がないことが証明されている。また、その正確さの違いは、作文を書いている間にペアが行う文法や語彙についてのインタラクションが要因であるが、話し合いがどの程度行われるかは、ペアの親密度と言語能力の差により異なるということが指摘されている。本研究は、この結果が日本語学習にも当てはまるのか、また、ペアで書く作文は、内容の質にも影響を与えるのかという2点を調べることを目的とした。対象レベルは「とびら」を主教材とした中級レベルで、学習者には、個人とペア(9組)で書く作文の課題をそれぞれ3つ与えた。作文の内容は「とびら」各課のテーマに関連したもので、かつ自分の国と比較できるトピックで統一し、その課で学習した新出文法を多く使うように指示した。また、それぞれのペアがどのようなインタラクションを経て作文を書いたのかを知るため、作文を書く過程でのインタラクションは全て録音させた。発表では、個人とペアの作文を、正確さ、複雑さ、長さ、内容の4点から比較した結果を報告し、その差の要因を録音データを用いながら考察する。また、ペアで書く活動の効用とクラス内でその活動を行う教師側のメリット、活動後のアンケートをもとにした学習者の意見についても報告する。

### 「「書く活動」を通して生み出される学習者のやる気・創造力と日本語レベルの向上：初級、中級、上級レベルでの実践報告」(Implementing writing activities for enhancing students' motivation, creativity, and proficiency levels)

Junko Tokuda, University of California, San Diego

外国語学習を強化し定着させるための有効な手段の一つに、「書くこと」が挙げられる(Curtain & Dahlberg, 2010)。外国語のクラスでは書く活動を通して、文法力、語彙力だけではなく、表現力や文章構成力などを身につけることができる(Barkaoui, 2007)。学習者は書く活動を通して学習した内容を振り返り、自己評価及びクラスメート・教師からのフィードバックをもとに書き直しの作業を行う過程で、書き言葉特有の表現を学ぶことができる。また書く作業は学習者の自己表現力や創造力を発揮する場にもなり、読み手を意識させることで目的のある学習活動の実現が可能になる(Curtain & Dahlberg, 2010)。外国語のクラスの課題としてよく使われるものに、作文やエッセイがある。本発表ではそれを単なる課題として終わらせるのではなく、読み手を意識した「プロジェクト」として取り組ませることにより、学習者がやる気を維持しながら課題に取り組み、学期末には自信を深め、達成感を覚えながら自己の学習の成果を振り返ることができるようなプロジェクトの導入について紹介する。初級のクラスでは語彙力、表現力が乏しいながらも、履修済みの文法、語彙などを使いながら自分自身について表現する「自伝」の作成、中上級のクラスでは文学作品などの読みの活動を通して学んだ知識・テクニックを活かしながら創作活動に取り組む「クリエイティブ・ライティング」の活動、更に一学期をかけて行った個人指導の学生の活動例を紹介する。またテクノロジーを利用した創作活動や作品発表を取り入れることで、学習の目的が21世紀のスキルを視野に入れたものへと幅広くなる。本発表では、こうしたプロジェクトが学習者にもたらす意義について考察したい。

## SESSION 3-C: PEDAGOGY PAPERS [ BOREN ROOM ]

Chair: Yasuko Akiyama, Indiana University

### 「「おもしろさ」を「伝える」話術へのアプローチ」(How can we make a story funnier? Cultivating self-monitoring skills through applying storytelling techniques)

Miki Yagi and Wakana Maekawa, Harvard University

様々な教科書や授業内活動で、会話練習の形での発話の機会は工夫されてきている。しかし、実際に学習者が文法の運用に集中するだけでなく、話し手として相づち、速度、強弱を使い分けたり感情を伝えるという練習にまでたどり着くには、授業時間内で行うのは難しいというのが現実ではないだろうか。文法事項を学習し、語彙数が増えるとともに伝える情報が複雑になるにもかかわらず、発話テクニックが乏しいために聞き手に伝わりにくく、一方的な発話になるという傾向が観察された。そこで、本校2015年春学期の中級後半コースにおいて行った落語を取り入れた授業活動を通し、学習者の発話に対する意識の変化や有効性について検討した。本活動を通し教師主導の受動的な練習でなく、学習者の能動的な気づきと内省を通して改善を試みる過程を取り入れることで、自律学習さらには生涯学習意欲の向上も期待した。学習者はまず落語鑑賞を通して、笑いを作り出し聞き手を引きつける発話テクニックを観察し、分析した。学習者に気づかせることで(Schmidt(1990))自己モニター力を活性化させ、その後学習者が落語の語り手になった際に、それらの発話テクニックを積極的に反映させるよう促した。活動途中と終了後にアンケート調査を行い、学生の発話に対する意識の変化や本活動の効果について考察した。学習者の聞き手を意識した話し方への意識が高まり、さらに日本語会話の特徴にも改めて注目していたという結果がみられた。本発表では、発話テクニックの指導における教師の役割と介入の効果、また授業活動としての適切さを問ひかけ、今後の課題を提示したい。

### 「オノマトペの副詞用法とアクション主体の総合教授法」(Integrated method of teaching adverbial Japanese onomatopoeia through action)

Junko Baba, University of South Carolina

オノマトペの使用頻度が日本社会の各分野で増加傾向にあるとされ、日本語教育その他においても近年研究や教材開発が推進されてきている。しかし、一般語彙と本質的に異なるオノマトペの特徴を考慮に入れた適切なアプローチや具体的な教授法はあまりないように思う。本発表では、米大学での日本語教育現場におけるリサーチの実践報告を踏まえて、オノマトペを教える際の問題点及び留意点、更には何をどのように教えるかを考慮に入れた効果的な教授法を示唆する。教授法の他にも脳科学や演劇法等の分野からもヒントを得た学際的なアプローチとする。学習項目としては特に日本語のオノマトペの中でも重要な擬態語を中心とし、文法的には特にオノマトペの中核をなす様態副詞を含む副詞用法に主眼をおく。オノマトペ語彙習得プロセスの特異性にも言及し文化面も含めた総合的な教授法を推奨する。特にオノマトペの副詞が修飾する動詞との関係を論じると同時に、動詞を伴うアクションを主体としたアプローチが効果的である事を提唱する。オノマトペは音象徴を持ち全脳の情報処理が行われることから五感や体を駆使する総合的な教授法が有効と思われる。擬情語を始めとして、話し手や書き手の表現力及び微妙なニュアンスに関わっている為にドラマ的なコンテキストも必要と考えられる。

### 「言語景観と日本語教育: 日本語学習者が収集した言語景観データの分析と活用法」(Linguistic landscape and Japanese language education: An analysis of linguistic landscape data collected by JFL learners)

Asako Hayashi-Takakura, University of California, Los Angeles

言語景観は、社会学、都市計画学、社会言語学などの分野で研究が進んでいるが、言語景観の調査研究をどのように理論として確立し、言語教育に活かしていくかは、言語教育者にとって今後の重要な課題であると言える(Kramsch, 2015)。本発表では、まず言語景観の定義を再考し、日本語を対象とした言語景観の先行研究を紹介する。さらに南カリフォルニアの州立大学の初級(50-100時間終了時)と中級(320時間終了時)学習者と共に収集した言語景観のデータから、アメリカ国内の公共の場で、日本語学習者が目にする日本語の種類と質を分析した結果を発表する。初級学習者には一学期目の期末プロジェクトとして、自分の身の回りにある教科書以外の日本語を撮影して提出するという課題を出した。124枚の写真から被写体の種類(看板、商品ラベル、印刷物など)と文字量を分析した。二学期目の期末プロジェクトでは、135の既習漢字を言語景観の中から見つけて撮影し、提出させた。学生が撮影した115枚の写真の中から漢字の頻度を分析した。中級学習者には「公共の場で見つけた変な日本語(誤字や文法の誤り)の写真の撮る」という課題を出した。40枚の写真から、被写体の撮影場所と、誤記の凡例を考察した。これらの課題はデータ収集という当初の目的だけでなく、学習者自身が日常、受動的に目にしている日本語を再認識できたという利点もあった。学習者の中には、コース履修後、日本に留学し、言語景観を撮影し続けている者もいる。今後も言語景観の画像データを学習者主体で収集しながら、日本語教育に有効に活用していきたい。

### 「人生は紙飛行機」比喩的表現を意識させる中級授業での試み」("Life is a paper plane": Report on incorporating metaphor instruction in intermediate Japanese class)

Yasuko Akiyama and Natsuko Tsujimura, Indiana University

比喩的表現 (figurative speech) は我々の日常生活に深く浸透しており、それに対する literal speech との区別は、母語であっても指摘されないと気がつかない場合が多い。(Lakoff & Johnson 1980, 2003) 語学教育において、メタファーに焦点をあてる重要性が指摘されて久しく、様々な言語に関する研究が報告されている。(Holme, 2004; Goatly, 2011)。しかし、メタファーの概念を念頭にいった指導は、語彙の域を超える指針や実践例がいまだ待たれている(Hoang, 2014)。日本語教育でも、メタファー導入の利点は岡(2005, 2014)などで強調されている一方、実際に大学で使われている教科書のほとんどが literal speech を基本としているため、メタファーをカリキュラムの一部とするのにはかなりの工夫が必要となっている。本発表では、Lakoff & Johnsonの主張するconceptual metaphorsもできるだけ取り入れ、日本語学習者にfigurative speechの存在把握と、コミュニケーションでの利点を理解させることを目的に試みた補助教材について報告する。特に、日本語中級のクラスでの実践報告とアンケート結果を通して、日本語授業でのメタファーに関わる指導について議論する。この授業では、内容重視型の教授法をふまえ、食やファッション、教育といった、特定のテーマの中にメタファーをとりいれてみた。読み教材、視覚聴覚教材をもとに、学生のメタファーやその元となる学習言語や、学生の母語に根ざす文化理解や、メタファー自体に関する意識、理解を深めるのが目的の一つである。この試みの行われるクラスでは、半数がアジア圏

(特に中国、韓国)からの学生であり、メタファーへの意識を高めるなかで、扱う内容の理解とともに、異文化を学習者がどう比較し分析していったかも検討する。

### **SESSION 3-D: SECOND LANGUAGE ACQUISITION (SLA) AND LANGUAGE AND CULTURE SIG PAPERS [JEFFERSON ROOM]**

*Chair: Soichiro Motohashi, Kalamazoo College*

#### **"On the learning of viewpoint consistency in Japanese narratives"**

**Akiko Kashiwagi-Wood, Oakland University**

One of the causes for the unnaturalness in narrative discourse written by learners of Japanese is the inconsistency of viewpoint within the text (Watanabe, 1996). For example, when describing an event, in English, it is preferred that one places the speaker's viewpoint outside of the situation whereas in Japanese, one places the viewpoint within the situation (Hinds, 1986). As the proficiency level of learners increases, the length of writings that they are asked to produce will increase from sentence to paragraph to discourse levels. Writing exercises such as "Write about your Christmas memory" will be assigned, but frequently, the learners are unaware that viewpoint consistency is one of the key factors in Japanese narratives and thus, tend to produce texts that remain somewhat awkward even after grammatical corrections are made. Previous studies have indicated that explicit instruction of which viewpoint to take would influence the L2 learners' writing under experimental conditions (Watanabe, 2012, Wei, 2010). The proficiency levels of the learners in these studies are advanced with mainly Asian L1 background; few English L1 learners, who are accustomed to a different narrative structure, have been studied. This study reports the uses of viewpoint expressions in written narratives by beginner English native learners of Japanese. The lower proficiency learners were chosen because many of the viewpoint expressions (e.g. -te ageru/morau/kureru) are introduced early in their study that they need to be able to use them effectively in writings. The data were collected using Wei's four-panel manga (Wei, 2010). As of this moment, the analysis is not complete. In this presentation, the results from the written data analysis will be reported. Additionally, the instructional materials, which will be created based on the assumption that 'consciousness as awareness' (Schmidt, 1990) is an effective factor for facilitating acquisition, will be shared.

#### **"L2 Japanese learner's development in conversational style: An analysis of overlap in talk-in-interaction"**

**Rie Maruyama, University of Arizona**

This case study presents changes in an L2 Japanese learner's production of overlapped utterances from the perspective of the development of interactional competence during study abroad. Although overlap is very common in conversation, it is rarely mentioned in language classroom. Turn-taking strategies are part of the interactional resources that participants in conversation use for effective interaction (Young, 2008). Previous studies have suggested that overlapped utterances in talk-in-interaction can function positively to show understanding, cooperation and involvement and to move a conversation forward (e.g. Tannen, 1985; Maynard, 1989; Fujii & Otsuka, 1994). Few studies, however, have examined L2 Japanese learners' overlapped utterances in conversation, and longitudinal study is lacking. The present study examined interview-style conversation data between an American male L2 Japanese learner and a native Japanese speaker. The learner studied abroad in Japan for one academic year and the interviews were recorded before and after study abroad. Listening to the conversation data, the post-study abroad interview included notably more overlapped utterances and sounded more engaged compared to the pre-study abroad interview. In order to figure out the change in detail, the data was transcribed and analyzed to answer the following questions. 1) What types of overlaps are observed in native and L2 speakers' utterances? 2) Do the frequency and types of overlap change after study abroad? The results were also examined in relation to the learner's proficiency level and language contacts during study abroad.

#### **"Japanese politeness behavior in a Level 2 classroom: Cultural politeness norms and perceptions"**

**Karen Curtin, Ohio State University**

While the grammatical aspects of Japanese politeness, such as humble and honorific forms, can present a challenge to language learners, it is perhaps with even greater difficulty that learners must choose how and when to apply various politeness behaviors. Educators and scholars have discussed the importance of teaching Japanese politeness, yet in-depth micro-ethnographic research regarding how learners enact and conceive of politeness is still lacking in the field. This research examines excerpts from a year long study of a Level 2 Japanese language classroom, blending traditions in discourse analysis in education (Bloomer 2005; Cazden 2002; Geertz 1973; Volosinov 1929/1973trans.) with a novel approach to analysis focusing on politeness as enacted in American culture (Celce-Murcia & Olshtain 2006; Tannen 2006; Tannen 1981a; Tannen 1981b; Tannen 1984) and Japanese (Jordan et al. 1989; Kubota 1990; Kabaya 2006; Yoshikawa 2011). Furthermore, students' perception of Japanese politeness as "other" and "different" add insight into how affective stance may play a role in the struggle so many learners have regarding Japanese politeness behavior. Finally, the research draws pedagogical implications on how teachers can facilitate changing the "otherness" perception of Japanese politeness behavior to a familiar and accessible norm.

#### **「ビジネス・プロジェクトを使用した中級日本語学習者のための言語・文化学習：在米日系企業の日本人雇用者によるオンライン・レクチャーの有効性」(The effectiveness of a Japanese employee's online lecture to enhance high-intermediate learners' linguistic and contextual competence)**

**Soichiro Motohashi, Kalamazoo College**

米国の外国語教育において、実社会で起きている出来事を教材に取り入れるケース・メソッドという手法の有効性は、これまでの事例で証明されている。その中でも、ビジネスという題材を扱ったケース・メソッドを言語教育に結びつけた実

践例は多く存在する。日本語教育においても、中級以上の学習者にビジネスを使用することの有効性は強まっており（高見・筒井 2014）、実際に授業で使われる機会も徐々に増えている。しかし、実際に日系企業に勤めている日本人が直接的に学習者と対話するビジネス・プロジェクトという事例は多くはないだろう。このプロジェクトでは、(1)在米日系企業の日本人雇用者によるオンライン・レクチャーを実施し、(2)レクチャーで学んだことをもとに学習者が独自のビジネス・プランを企画し、(3)クラス内で発表およびレポートを提出する、という言語能力を総合的に駆使するアクティビティーを実施する。このプロジェクトを通じて、学習者は日本の言語・文化の両面における能力向上を図ることを目指す。言語能力としては、既知の文法や語彙の他にも、目的言語話者によるビジネス関連の語彙や文法を習得することが期待される。また、文化理解としては、実際の日本のビジネス社会における雇用者、企業の組織、業界の構造などを学ぶことが期待される。さらに、発想力や表現力の向上という、実社会で求められる社会的能力を養う機会を得ることもできる。今回の発表では、上述のビジネス・プロジェクトを教材として扱うに至った経緯、プロジェクトの概要、評価方法、実施後に発見された利点や課題、将来的発展のための可能性について議論する。

### SESSION 3-E: LINGUISTICS PANEL [ UNIVERSITY ROOM ]

Chair: Polly Szatrowski, University of Minnesota

**Panel Title:** 「日本語母語話者・非母語話者・英語母語話による話し言葉と書き言葉の談話分析一言及表現を中心に」  
(Reference in native Japanese, nonnative Japanese, and English written and spoken discourse)

**Panel Abstract:** This panel focuses on reference in written (essays, opinion texts, mid-term reports, reports on survey data) and spoken discourse (contest stories, animation narratives, Taster Lunch conversations) by Japanese (JPN), English (ENG), and nonnative Japanese (NNJ) speaker/writers. The papers focus on writers' use of first-person pronouns (watasi 'I'/watasi-tati 'we'), storytellers' n desu+φ/yo/ne/kedo 'It's that ...+φ/you know/Isn't it/but)', narrators' introductions of referents that are difficult to verbalize, and Taster Lunch participants' references for unfamiliar food. The first paper contributes to research on JPN and NNJ uses of first person pronouns (Tseng 2004, Chang 2010) and topic deletion in compositions (Miyajima 2015), by investigating the use of first person pronouns by JPN writers across text genres and NNJ writers' uses in opinion texts. Unlike Nabatame's (2007) claim that n desu +φ/yo/ne are used for turn management, the second paper demonstrates that JPN storytellers' choices among n desu+φ/yo/ne/kedo serve to foreground/background the referent situation, project the level of connection with the main topic, and adjust focus, while n desu+φ/yo/ne were absent in NNJ stories. The third paper builds on research on modality and evidentiality in JPN/ENG/NNJ conversations (Szatrowski 2014, 2015), and shows how JPN narrators use these forms and fillers to introduce and encourage negotiation of unusual referents in animation narratives. The fourth paper on reference in JPN/ENG/NNJ Taster Lunch conversations, modifies research on referring expressions in monologic narratives (Clancy 1980, Watanabe 2009, 2010) to reflect the dynamic development of references to unfamiliar food through negotiation of possible references in predicate and non-predicate position (Minami 1993) based on participants' multi-sensory experience. Results of this research contribute to our knowledge of the use of Japanese and English reference in a variety of written and spoken discourse genres, and suggest ways for teaching Japanese learners how to use referring expressions in written and spoken discourse.

**「どのように日本人大学生は文章ジャンルによって 1 人称「私」と「私たち」を使い分けるのか」(How do Japanese university students use first person pronouns 'watasi' 'I' versus 'watasi-tati' 'we' across different text genres?)**

Mitsuko Kido, University of Tsukuba

本研究では、書き言葉の文章ジャンルにおいて書き手がどのように自分を指すのかに着目し、「私」と「私たち」に言及する場合の使い分けを明らかにすることを目的とする。日本人大学生 30 名が文章表現の授業で書いた作文 4 種、随筆風の自由作文、意見文、意見主張を主とする中間レポート、調査データに基づく期末レポートについて 1 人称「私」と「私たち」の出現頻度、および出現した文の内容を調べた。その結果、随筆風の自由作文では「私」が頻出し、自分の意見を主張する場合と自分の体験を述べる場合が見られた。意見文では主張の文に「私」が使用されるのに対し、レポートでは「私」の他に「私たち」の使用が見られた。レポートでは「私たち」の使用により、読み手の共感を得ることを期待し、自分の意見や体験を他者と共有して、一般化し正当化しているように見える。一方、上級作文の授業で日本語学習者が書いたレポートと意見文では「私たち」という 1 人称複数を使用されていなかった。「私」については意見文では出現するが、母語話者なら「私は」とするところを「私の意見では」のように「私は」を用いない表現も見られ、母語話者とは異なる形式で用いる傾向が見られる。日本語教育でも作文における人称については、日本語学習者と母語話者の意見文の「私は」の使用傾向の違い（張希朱 2010）や台湾の日本語学習者の 1 人称代名詞の不適切な使用（曾儀婷 2004）、テキストタイプによる主題/主語の省略の違い（宮島敦子 2015）が指摘されている。本研究では文章ジャンルと 1 人称単数と複数の使い分けの関連性を示唆することにより、日本語学習者の作文での人称使用への理解を深めるのに貢献できる。

**「物語談話において言語化しにくい指示対象にどう言及するか？」(How do Japanese and English speakers refer to referents difficult to verbalize in narrative discourse?)**

Fumio Watanabe, Yamagata University

本発表では、アニメーションのストーリーを語る日本語 (JPN)、英語 (ENG)、日本語学習者の語り手と母語話者の聞き手による日本語 (NNJ) の物語談話において、言語化しにくい指示対象に言及する際の発話の形式、参加者同士の意味交渉、非言語行動などを分析・対照することを目的とする。「言語化しにくい指示対象」とは、アニメーションの世界にしか存在せず、単独の語彙では表現しにくい指示対象とする。言語化しにくい指示対象に言及する際にどのような形式が用いられているか、ザトラウスキー (2014, 2015) のモダリティとエビデンシャルティの表現 (ME 表現) に加えて、繰り

返し、フィラーなどを手がかりに分析する。ザトラウスキー（2014,2015）は、試食会の談話で未知の食べ物について会話参加者がどのように同定したり評価するかJPN,ENG,NNJの談話を比較し、それらの発話連鎖におけるME表現の用い方が異なること、およびNNJにおけるME表現の種類が少ないことを報告している。本研究のデータの分析の結果、言語化しにくい指示対象はJPNで「なんか」、「みたいなの」、ENGで“like”, “kind of”などの形式を含む名詞句で導入され、その後の発話連鎖ではその指示対象が関与する状況について意味交渉が起こる傾向が見られた。一方、NNJでは「あの一」などのフィラーや単語の反復を用いる傾向があり、その後の発話連鎖では近似の語彙への同定を目指した意味交渉が観察された。母語場面と接触場面におけるME表現、繰り返し、フィラーなどの用い方の違いによる発話連鎖への影響の解明は、学習者が会話展開を予測する力に貢献する。

**「ストーリーの語りにおける発話末の「んです+φ /よ/ね/けど」の形式選択について」(On the selection of sentence final n desu+φ/yo/ne/kedo 'It's that ...φ./you know/isn't it/but' forms in Japanese native and nonnative speech)**

**Mariko Masuda**, University of Tokyo

出来事を口頭で語るとき、その内容の総体は、多数の「発話」の集積として実現される。本発表では、「ストーリーから複数の発話への分割化」の実際をストーリー中の各発話末の「んです+X」（「～んですね」「んですよ」「んですけど」「んですφ」）の使い分けの分析を通して明らかにする。分析するデータは「民間話芸調査「わたしのちょっと面白い話コンテスト」」（神戸大・定延利之氏による）の日本語話者、日本語学習者による体験談の語りの録画記録である。データはすべて、決められた話し手によって自己の体験談が、その面白さを聞き手に伝えることを目的に語られている。そのため、基本的にターンの交替は起こらないが、笑いや相づち等の聞き手の反応を意識しながら語られる点で、「独話」ではない。会話における発話末の「んですね」と「んですよ」の使い分けについては、「発話権の管理」という観点から考察した生天目(2007)があり、これらの形式の選択がターンの維持や委譲に関わることを指摘している。しかし、上述したようにターンの交替を前提としない語りにおいても、上記2形式はともに使用されていた。また、これらとともに類似形式「んですけど」「んですφ」が多用されていた。以上を踏まえ、本発表では上記4形式を合わせて考察したところ、日本語話者では、これらの選択が、当該発話で「言及される事態」の前景化／後景化をもたらし、聞き手に当該発話と本題との関連度についての予測を可能にして、話の焦点の調整を行っていた。また、日本語学習者においては、「んですね」及び「んですよ」が使用されない傾向が見られたことから、その指導法の再考の必要性が示唆された。

**“Negotiation of references for unfamiliar food in Japanese, English, and nonnative Japanese Taster Lunch conversations”**

**Polly Sztatowski**, University of Minnesota

In this paper, I investigate how Japanese, English, and nonnative Japanese speakers negotiate references to unfamiliar food in videotaped Taster Lunch conversations. The analysis investigates (1) What aspects of the food do participants use as resources to create references for unfamiliar food?, (2) How are possible references negotiated through the conversation? Previous research focused on narrators' use of referring expressions in non-predicate components in film/animation narratives (Clancy 1980, Watanabe 2009, 2010). I include predicate elements in my analysis, and investigate how references to unfamiliar food are negotiated by a multiple of participants in talk-in-interaction. Patterns in the use of nouns/noun phrases to refer to unfamiliar food show that Japanese native speakers use demonstrative pronouns initially, and subsequently use more specific references including features of color, shape, texture, flavor, and combinations. Possible references for unfamiliar foods are monitored and negotiated in predicate elements and non-predicate components (Minami 1993, 1997). Participants negotiate their agreement on predicate descriptions, assessments and categorizations of food, and using these expressions in non-predicate references suggests their agreement on and contributes to the stability of references for unfamiliar food. In contrast, non-native Japanese speakers tended to use only demonstrative pronouns or ellipsis when referring to unfamiliar food. In both the native English and non-native Japanese speakers' Taster Lunch conversations, there was less negotiation of agreement on predicate elements before using them as non-predicate components. Results suggest that Japanese learners whose native language is English need to be taught how to negotiate references for unfamiliar referents (i.e., how to respond to other participants' descriptions, assessments, and categorizations), and use reference strategies related to Japanese sentence structure. This study contributes to research on reference strategies, contextualized social and cognitive activity, and language and food, and has applications for teaching Japanese.

**SESSION 3-F: LITERATURE PAPERS [ VIRGINIA ROOM ]**

**Chair: Lawrence Marceau**, University of Auckland

**“Employing the films of Ozu Yasujiro to teach Japanese culture”**

**Scott Langton**, Austin College

Ozu Yasujiro's films portray the events of everyday existence with an intimacy that lends itself readily to teaching undergraduates about domestic life in Japan. This paper focuses on several of Ozu's postwar films, specifically Late Spring (1949), Early Summer (1951), Late Autumn (1960), and Tokyo Story (1953), and their portrayal of tensions within the family relating to marriage, aging, and responsibility to parents. It has three objectives: first, the analysis of Ozu's depiction of the conflicting impulses of “modernity” and “tradition” through the juxtaposition of the themes of independence and filial duty, self-absorption and self-sacrifice; second, the examination of Ozu's privileging of Japan's cultural heritage through the incorporation of “classical” cultural artifacts in an era of Allied occupation and high economic growth; and third, the discussion of Ozu's distinctive filmic style—the generous use of cut/cross-cut and medium shots, the extended cutaway shots, and the unhurried

pacing. These various elements may be productively employed to teach undergraduates about Japanese society, culture, and aesthetics in the postwar era.

**“Cultural memory and constructions of gender in modern Japan: Reexamining the legacy of Hara Setsuko”**

**Kelly Hansen**, San Diego State University

This project re-examines the legacy of actress Setsuko Hara (b. 1920) as a universal image of traditional Japanese femininity in the collective memory of the Japanese public. During her 28-year career, spanning the mid 1930s to early 1960s, Hara appeared in over one hundred feature films. However, her legacy draws overwhelmingly on a limited number of her later films. She is most frequently associated with director Ozu Yasujiro, whose films tend to focus on the quiet, mundane lives of middle-class Japanese, earning him the reputation of the most “Japanese” of all Japanese directors. Hara is by association considered an actress who represents the unique qualities of the traditional Japanese woman. She is thus linked to Orientalist discourse that highlights Japanese gender roles as static and unaffected by modernity. This study will look at both pre- and early post-war propaganda films to examine how Hara’s charismatic nature is used to promote changing attitudes first toward military aggression and war, and later, Western democracy. Films to be analyzed include (1) *The New Earth* (*Atarashiki tsuchi*, 1937), a Japanese/German collaboration that depicts Japan as weak and ineffectual against the more advanced culture of the West, (2) *Naval Brigade at Shanghai* (*Shanghai rikusentai*, 1939), in which Hara plays a Chinese woman who originally despises the Japanese army but gradually comes to sympathize with their position, and (3) *No Regrets for Our Youth* (*Waga seishun ni kui nashi*, 1946), produced under the censorship of U.S. occupation forces, and reflecting a new message of postwar peace and democracy. I argue that in these early films, her charismatic, onscreen presence is used not to promote depictions of the universal Japanese woman, but rather specific historical situations reflecting the propaganda goals of the time.

**“Premodern poetics for a modern lyric voice”**

**Rachel Epstein**, Philadelphia University

Following the Sino-Japanese War there was a revival of premodern poetic tropes as means to a modern lyric voice. A prime case in point is the 1897 multi-author collection ‘Jojooshi,’ ‘Lyric Poetry,’ inspired by the 1798 ‘Lyrical Ballads’ by English poets William Wordsworth and Samuel Taylor Coleridge. The Japanese poets who contributed to the ‘Jojooshi’ aimed for an individualistic poetry, expressive of hidden emotions, in the spirit of English romanticism. In doing so they were reacting to a tenacious association of shintaishi, the “new poetry” of the Meiji years, with military nationalism and its institutions. Yet as they drew on the English lyric tradition they tapped into a different source of Japanese nationalism: classical poetics. While earlier shintaishi poets had written in opposition to the feminine “flowers and birds” of the tradition, the ‘Jojooshi’ poets -- among them Kunikida Doppo, Tayama Katai, and Yanagida Kunio -- wrote in opposition to the prosaic and didactic qualities that had aligned the new poetry with impersonal approval of war. They knitted together hallmark tropes of the old imperial poetry collections with personal pronouns, presenting their attachment to the land of Japan as confession. This phase in shintaishi reveals how a classical poetics was re-masculinized for a self-consciously modern outlook, and thus inadvertently established as a language for a new kind of cultural nationalism.

**“Esopo, Isopo, Aesop: Early modern Japan's fables and the Isopo monogatari emaki”**

**Lawrence Marceau**, University of Auckland

One of the first works to emerge from the Jesuit Mission Press in Japan was *Esopo no fabulas*, a translation of Aesop’s Fables from Latin and European vernacular sources. Rendered into romanized orthography, this translation was accessible only to the missionaries and a few kirishitan converts with Latin training. This edition did not survive the suppression of Christianity under the Tokugawa, with a single volume now in the British Library. However, another translation, *Isopo monogatari* (The Tales of Isopo), this time into standard bungo written Japanese orthography, appeared in wooden moveable type format. The contents of this version overlap with but are separate from the romanized edition, including 29 episodes from the “Life of Aesop” and 65 fables. These tales not only survived suppression, but thrived in Japan, eventually appearing in woodblock print form, the earliest edition dated Manji 2 (1659). This edition also boasts 24 illustrations, eight of Aesop’s biography, and 16 of the fables. Aesop (J. “Isopo”) appears in the illustrations dressed as a Japanese servant, and he interacts with others, who are depicted as Japanese, Ming Chinese, and other East Asian ethnicities. A lavishly illustrated handscroll (J. monogatari emaki) set also exists from the early 17th century, but scholars have not discussed it since 1930, and its illustrations have until now been unknown. Isopo here appears in a Ming Chinese setting, and everyone depicted here, including humans in the fables, is dressed in Ming costume. This presentation compares the text and illustrations of multiple European and Japanese editions, and argues, among other things, that those involved with the handscrolls and published versions have Aesop emerging in Japan as a non-European in order to distance him from his kirishitan heritage.

**3:20 p.m.-5:00 p.m. — Session 4**

**SESSION 4-A: PEDAGOGY PAPERS [ SENECA ROOM ]**

**Chair: Mitsue Tabata-Sandom**, University of Hawaii, Manoa

「年少者用 SPOT の開発－日本の公立小学校、米国日本語補習校、インターナショナルスクールでの実施結果から－」 (Development of SPOT for children: Results in a Japanese supplementary school, a public elementary school of Japan, and an international school)

**Takako Sakai, Chieko Kano, and Noriko Kobayashi**, University of Tsukuba

多言語背景の年少者の日本語力測定に関して、教育現場から短時間で客観的に測定可能なテストが求められている。海外の日本語補習校、国内外のインターナショナルスクール、帰国子女の取り出し学級など多言語背景にある子供の学習言語の日本語力を、日本の普通校の小学校の児童との比較や日本語力の変化を見ることが可能なテストの開発を進めてきた。SPOTは、自然な話速度の音声聞きながら同じ問題文の（ ）にひらがな1文字を入れる形式のテストで、成人日本語学習者対象に開発し広く利用されているが、その年少者版として、小学校国語の教科書の中から特に「学習言語」として学ぶと考えられる項目を取り出して作成した。問題例：このふねは、さかなをとるため（ ）ふねです。（1年）試作したテストを以下の学校で実施した。1）日本の公立小学校（1年～6年）587名、2）アメリカの中西部の日本語補習校（1年～中3）105名、3）日本のインターナショナルスクール（5才～中3）90名。結果として以下のことが分かった。テストは10分以内で終わり採点も容易であるので利用しやすい。横断的、縦断的な比較が容易にできる。例えば、日本の公立校の結果を参照しながら各児童・生徒の得点の意味を解釈できる。日本の公立校普通クラスでの実施では、一般の児童は4年生以上がやや天井効果を示している。聞き取り調査から緘黙児童やアスペルガーの傾向などの児童を見分けるための利用の見通しが示された。インターナショナルスクールの実施から、同学年内での分散が大きい。SPOTの形式を利用した漢字語彙力を測る漢字SPOT（年少者用）の開発も進めている。

**「流暢性指標の縦断的研究」(A longitudinal study of fluency development in Japanese learners using objective measures)**

**Saori Masumoto Houston, Purdue University**

外国語習得で重要な要素である、流暢性など口答能力の評価はこれまでOPIに代表されるようなやり方で主観的に行われてきているが、それで得られる評価は初級-上、中級-上などの範疇的な評価であり、連続的な尺度ではない。連続的な尺度による流暢性評価の実現は、客観的指標の使用によって可能にすることができる。客観的指標にはSpeech rateやMean length of runなどがあり、主観評価と高く相関することが明らかになっている。しかし、これまでの研究は英語学習者を対象としたものが多く、日本語学習者の研究は多くない。また、多くの縦断的流暢性関連の研究は、流暢性指標を測るタスクに統一性が無いため、流暢性の厳密な比較にならない研究が多い。このような現状を受け本研究では同一タスクを3ヶ月のインターバルを置き3回学生に課し、1学期半の期間で発話速度やその他の流暢性を示す客観指標の発達を、クラス全体と学生個人で観察する。さらには客観指標のような連続的な数値を採用することで流暢性の発達を精密に検証する。またどのように指標が客観指標に貢献するかも検証した。この結果から流暢性の効果的な指導のありかたも考察する。

**「日本語初級コースにおけるタイムドディクテーションの効果ーカタカナ書字における正確さと流暢さを中心にー」(Effects of a timed-dictation activity in an introductory course in Japanese: Focusing on the accuracy and fluency of writing katakana)**

**Aya Okada, Purdue University**

学習者のカタカナ書字能力は、初級で学習した後に立ち立てて練習をする機会を与えることが少ないために定着がしにくく、教師側も頭を悩ませる点である。カタカナを書くことに難しさを感じている学習者は多く、習得の遅れが指摘されている(陣内、2006)。更に、カタカナだけではなく、ひらがなや漢字の習得の遅れが目立つ学生も少なくないだろう。これらの問題解決に向けて、タイムドディクテーションという活動を実際のコースに導入した。タイムドディクテーションとは、学生が読み上げ音声を書き取る際に与えられる時間を制限したディクテーション活動のことである。この活動はひらがなや漢字も含めた書字能力一般を高めるべく考案されたものであるが、本研究ではカタカナの書字能力に焦点を当てた。教師は、実際に授業内で使うものと同じ読み上げ音声を事前に学生に公開しておき、学生が自分で練習ができるようにしておいた。授業内で行ったディクテーションの結果は、チャプターテストの一部として成績に加算した。この活動を一学期に5回取り入れたコースと、通常の書き指導のみのコースの両方で、学期末にカタカナ書字能力を測るテストを実施した。その結果、タイムドディクテーションを導入したコースの受講者の方が正確さと流暢さの両面において優れていることがわかった。つまり、このタイムドディクテーションを取り入れることでカタカナの書字能力を高めることができると言えることがわかった。本発表では、タイムドディクテーションの手順と方法、そしてその結果について詳しく論じる。

**“Speed reading training for advanced learners of Japanese”**

**Mitsue Tabata-Sandom, University of Hawaii, Manoa**

This study reports the results of speed reading training in fourth-year university Japanese courses. Twenty-five students carried out 10-week speed reading training and 22 participants' data were obtained. For the training, ten texts were specially constructed. They were controlled in length, and the difficulty of vocabulary and grammar. Specifically, all the texts were written within 445 to 455 words. Based on the results of the initial vocabulary size test, the researcher constructed the texts in the way that the first 4000 words of J-LEX, an online lexical analyzer of Japanese texts, covered more than 95% of running words. Equally, the syntactic difficulty was controlled in the way that no advanced-level items were contained. For this procedure, Learning Item Analysis System was used. The change of the participants' reading speed, their preference of this approach compared to translation and pleasure reading, and the topic familiarity of each text were quantitatively analyzed. The results of a survey which examined the participants' responses toward this novel fluency development instruction were qualitatively analyzed. The obtained findings showed that the participants perceived that their reading speed as well as comprehension increased although their speed did not increase statistically significantly. About 80% of the participants welcomed this novel instruction and more than 60% of them wanted to try it on their own. However, the participants in general tended to fail to fully understand the efficacy and meaning of fluency development, and consequently did not strive to read faster. In conclusion, the paper argues that the influence coming from the previous grammar-translation method nurtured a

biased learning perceptions in the participants, which became an obstacle for the participants to fully engage in this fluency instructional approach.

#### **SESSION 4-B: PEDAGOGY AND PROFESSIONAL DEVELOPMENT SIG PAPERS [ COLUMBIA ROOM ]**

*Chair: Kazuaki Nakazawa, Yuan Ze University (Taiwan)*

##### **“Classroom interactional competence and teacher development”**

**Yumiko Tateyama**, University of Hawaii, Manoa

Student-teacher interactions in the L2 classroom have traditionally been characterized as the well-known three-part exchange structure Initiation-Response-Feedback or IRF (Sinclair & Coulthard, 1975). While such exchange structure is still common, studies that examine classroom discourse from a conversation analytic perspective have revealed that student-teacher interactions are more dynamic than what is characterized by the IRF structure (Lee, 2007; Walsh, 2011). The teacher makes contingent and ad hoc decisions while monitoring and acting on what becomes available within the sequence of interaction. Teachers also use different interactional strategies to create space for learning (Walsh, 2013). A better understanding of the dynamics of classroom interaction and the incorporation of this understanding into teacher training would be useful, particularly for novice teachers in their development of classroom interactional competence. The current study investigates how student-teacher interactions in the JFL classroom unfold according to specific pedagogical goals and micro-contexts (Seedhouse, 2004). Data were collected from six college-level JFL classes (beginning to advanced) in the U.S. The analysis focuses on the teacher-fronted segment of the lesson where the teacher interacts with students. In addition to verbal resources, the teacher use of nonverbal resources (e.g., gesture, gaze) was also examined. For the current study, analysis focuses on a) the form-focused segment; b) the form-focused segment with conversation practice incorporated; and c) the meaning-focused discussion-style segment. The IRF type structure was more frequently observed in a). In b) the teacher expanded the talk with the student(s) by utilizing a receipt token such as ‘hee,’ which allowed the teacher and students to jointly construct a talk similar to one observed in typical conversation outside the classroom. In c), the teacher let grammatical mistakes pass and facilitated active student participation in the talk. Pedagogical implications, in particular the utility of the current analysis for teacher training, will be discussed.

##### **「「ダイバージェント」日本語教師に対する学生の視点と観察データ分析」(Observational analysis and students' perceptions of "divergent" Japanese language teachers)**

**Shinsuke Tsuchiya**, Ohio State University

Recently, the idea of Japan as a monolingual country with its language owned by ethnically homogenous Japanese people has been questioned due to globalization and increasing diversity in Japanese communities. Yet, iconic representations of “Japanese people” seem to dominate the content of language textbooks along with ideologies that are attached to the concept of native speakers. These ideologies include assumptions such as all native speakers have “perfect” Japanese and therefore they are preferred as language instructors (i.e., the native speaker fallacy). When such iconic and ideological representations are created, people are linguistically differentiated into social groups of native and nonnative speakers, and those who do not fit into the dichotomy are disregarded and explained away (Doerr, 2009). This presentation discusses the concept of the native speaker fallacy using a two-semester-long longitudinal observational data of those who do not fit in the dichotomy of native and nonnative speakers at a large Midwest University in the U.S. Specifically, teacher training process and classroom experience of dialectal speakers of Japanese, heritage speakers, and nonnative teachers with L1 other than English were observed and video-recorded. Participants’ identities were self-identified. When teaching a speaking class where English is not allowed, teachers used different strategies to construct their identity in Japanese, and occasional use of English to clarify their points and to build rapport with students. Further, students’ perceptions of these teachers were obtained through survey questionnaires and interviews. Results showed 1) participants’ stronger preference for having native speakers as their language teachers; 2) idealized attributes of native speakers in the definitions of a native speaker; and 3) students’ tendency to use visible attributes such as name, skin color, pronunciation, accent, language competence, teaching skill, and behavior (i.e., apologizing frequently) to determine whether they thought of their teacher as a native speaker of Japanese or not.

##### **「現役日本語教師と教師を目指す大学院生のITリテラシー認識調査」(Investigation of pre- and in-service Japanese teachers' self-efficacy of IT literacy)**

**Kazuaki Nakazawa**, Yuan Ze University (Taiwan)

近年、外国語の授業でもテクノロジーが活発に利用されるようになってきた。言語教育においてテクノロジーを効率的に活用するには、情報技術(IT)の知識やスキルといったITリテラシーを言語教師が持っていることが不可欠である(Ezziane, 2007)。また、現役教師だけでなく、言語教師を目指す大学生や大学院生にもITリテラシーが必要とされている。そのため、英語教育ではITリテラシーに関する多くの研究(Egbert, Paulus, & Nakamichi, 2002; Ezziane, 2007; 他)が報告されており、どのようなIT知識やスキルが必要なのか議論されている。しかし、日本語教育では未だ数が少ない(中澤・畑佐, 2008; Susser, 2005)。そこで、本研究では、以下の研究課題を調査した。1) 台湾の現役日本語教師と教師を目指す大学院生はITリテラシーに関するトレーニングを受けたことがあるのか。2) 現役日本語教師と教師を目指す大学院生間で、自分のITリテラシーレベルの認識に差があるのか。アンケート調査が2013年3～5月に行われ、29大学から58名の現役教師が、そして、8大学から27名の大学院生が回答した。回答分析の結果、現役教師と大学院生共に1) インターネットやPowerPoint、Word、Excelを頻繁に使う、2) 頻繁に使うソフトでも使用したことがない機能が多々ある、3) 大学院生の回答平均値の方が、現役教師よりも高い傾向にあることが明らかになった。また、学校のハードウェアが古い・性能が低い、ネット環境が不安定、時間の余裕がないといった問題に直面していて、環境の整備、ワークショップの開催等のサポ

ートが必要だと感じていることも分かった。本研究結果から、今後、教員養成課程や教師研修で、日本語教師の仕事内容に基づいたITリテラシーの体系的トレーニングが必要だと言える。

#### **SESSION 4-C: AP JAPANESE SIG AND STUDY ABROAD SIG PAPERS [ BOREN ROOM ]**

*Chair: Akiko Murata, Hosei University*

##### **“Engagement and Rigor in the AP Japanese Language and Culture Curriculum”**

**Ann Jordan, CAJLT**

The number of students taking the AP Japanese exam is steadily increasing, and many of these students will enroll in college Japanese language classes. In order for Japanese language programs at both levels to survive and thrive, articulation between high school and college teachers is essential. High school teachers need to know what kind of materials are covered in the college level courses that are targeted by the AP exam, and college teachers need to know what type of content is taught in high school AP classes. The presenter will provide a brief overview of the AP Japanese course and data from the 2015 exam results. The primary focus of the presentation is on the key elements of a content based instructional unit developed for the AP Japanese course which revolves around science, a topic that is challenging to teach and not often included in Japanese course curriculum. The presenter will share the essential questions that form the foundation of the learning outcomes, sample lesson plans, input and guided practice activities, authentic resources, formative and summative assessment tasks, and sample student work.

##### **「日本で日本語を学ぶ留学生の友人関係構築」 (Friendship development during study abroad in Japan)**

**Fumi Yamakawa, Toyo University**

本発表の目的は、日本の大学で日本語を学ぶ留学生の友人関係構築と友人との使用言語について明らかにすることである。留学生の友人関係には、大きく留学生同士の友人関係と日本人との友人関係の二つに分類できる。多くの先行研究では、留学生は同国人とのつながりが強く、日本人との友人関係を構築することは難しいと指摘されている (Bochner, Mcleoad, & Lin, 1977; 田中, 2003など)。その理由として、言語や文化の違いが挙げられている (横田, 1991など)。そこで本研究では、留学生15名を対象に彼らの友人関係について質問紙調査およびインタビュー調査を行った。具体的には、彼らがいつ、どこで、どのように留学生同士あるいは日本人学生と友人関係を構築しているのか、またその友人と何語を使用しているのか、ということである。調査の結果、留学生は日本人学生よりも留学生同士の友人関係が多いが、使用言語はそれぞれ異なっていた。留学生同士の友人が多いからといって日本語の使用が少ないということではなく、また逆に日本人の友人が多いからといって日本語を多く使用しているわけではないという実態が明らかになった。さらに、友人関係を構築するには言葉や文化の壁も障害となりうるが、それよりも「時間の共有」、「性格の一致」、「共通性」、「対等な関係性」などが重要な要素として浮かび上がった。これらの結果を留学プログラムのあり方との関連で考察していく。

##### **“How short-term study abroad leads to great language gains: An exploratory study”**

**Magara Maeda, University of Wisconsin, River Falls; Megumi Tsuchida, Kansai Gaidai University**

Increasing numbers of students are opting for short-term study abroad programs rather than semester- or year-long programs. Previous studies identified program duration and student initial language proficiency has an effect on student language gain (e.g. Brecht et al., 1995; Watson et al., 2013). In fact, studies reported that the low-initial language proficiency students gained most oral proficiency from a short program while students with higher-level initial language proficiency gained more from a long-term program (Mason, L., Powers, C., & Donnelly, S., 2015). This exploratory study examined the quality of the language program instruction and oral proficiency gain in a six-week summer study abroad program in Japan for science and technology (JIST) related majors from US colleges. Regardless of duration, many overseas Japanese language classes are often structured the same way as university Japanese classes in the U.S. by covering a grammar-structured textbook. The JIST program, on the other hand, focuses on application of the previously learned grammar by guiding students through contexts requiring its use. By maximizing its study abroad environment, this program helps students not only to develop their skills in Japanese but also to raise pragmatic awareness. In order to enhance students' "strategic competence" (Bachman & Palmer, 1996), instructors in this short-term program for low-intermediate level students also systematically integrated reflection and conversation strategies in instruction. A pre- and post-oral proficiency tests revealed a significant oral proficiency gain particularly in a story-telling task among the students. This finding suggests that short duration programs designed to capitalize on the context features of the program can be beneficial for language gain. Furthermore, it supports metacognitive strategy training can improve students' communicative skills (Cohen, 1998; Nakatani, 2005). This presentation will report the study details and implications.

##### **「双方向国際インターンシップを通じた言語文化的な学び」 (An analysis of language and culture learning through two-way international internships)**

**Akiko Murata, Hosei University**

本発表では、日米の大学間で実施している双方向の国際インターンシッププログラムを分析し、日米の学生の国際移動と両国でのインターンシップが、ことばと文化の学びにどのような関係にあるのかを分析する。近年、グローバルな学生の移動が加速化する中、国境を越えて複数の教育機関が協力して国際交流プログラムを運営し、学生が両国間を移動しつつ学ぶ新しい形のプログラム開発が始まっている。こうしたプログラムは、言語の教育とともに、文化的背景の異なる人々が関り合い、お互いの違いから学び合う多文化力 (山田2013) を育成する可能性を持っているが、日本語教育における可能性を可視化するような研究は十分に行われていない。そこで本発表では日米の2大学で実施しているインターンシップ

プログラムの連携を分析し、参加者間で2国間を移動しながら相互支援を行う際の、彼らの言語文化的な学びをインタビューと接触場面の分析を通して明らかにする。そしてことばと文化の教育を中心に考えた場合、両国の教員が事前にどのような指導を行い、さらに実施プロセスにおいてどのようなサポートをすることが必要かを明らかにすることで新しい形のスタディーアブロードと日本語教育の可能性を明らかにする。そして最後に、学習者のトランスナショナルなインターンシップを通じた相互支援が、従来の短期留学の中で捉えられてきた日本語学習にどのようなインパクトを与えるのかを検討し、このようなことばの教育が、学習者の言語文化の学びだけでなく、人としての成長に与える影響、また、彼らを取り巻く社会に与える影響についても考察する。

#### **SESSION 4-D: JAPANESE AS A HERITAGE LANGUAGE (JHL) AND JAPANESE FOR SPECIFIC PURPOSES (JSP) SIG PAPERS [JEFFERSON ROOM]**

*Chair: Lindsay Yotsukura, University of Maryland*

##### **「継承日本語学校で学ぶ児童・生徒の4年間における話す力の発達」(Japanese Saturday school heritage language learners' oral proficiency development over four years)**

**Kiyomi Chinen, Masako O. Douglas, and Hiroko C. Kataoka, California State University, Long Beach**

本発表では、継承日本語学校に通う児童・生徒の会話力を4年間に渡り縦断的に測定・分析した研究の結果を報告する。米国で継承日本語の児童・生徒の言語力の発達に関する研究では、文法力・語彙力を測定したもの（片岡他2008）、イメージングプログラムに在籍する継承日本語児童の物語を書く力を測定したもの（ダグラス他2013）、継承日本語学校在籍の児童の夏の日本滞在前後の日本語の会話力の変化を測定したもの（ダグラス2005）などがある。同じ子供の日本語力の変化を研究したものとしては、2010年と2012年に継承日本語学校に在籍する児童・生徒を対象にOBCを測定ツールとして2年間の変化を測ったものがある（ダグラス 2013）。本研究は、その継承日本語学校に在籍する同じ児童・生徒をさらにその2年後の2014年にオーラルインタビューをして話す力を測定したものである。本研究では、筆者らが2010年と2012年、そして2014年に行った測定をもとに、14名の話す力の変化を検証する。このうち7名は家庭で日本語を話す子どものためのプログラムに在籍しており（6年生から高校生）残りの7名は、日本文化を継承しているものの家庭で日本語を話す量が少ない子供のためのプログラムに在籍（5年生から高校生）している。この2つのグループのオーラルインタビューを録画し、ルーブリックを用いて、話す力を評価する。その結果を比較分析し報告する。また、日本語学校の卒業生を受け入れる大学の日本語プログラムの参考として、日本語学校で高校レベルを終えた生徒が卒業時に到達している話す力についても報告する。

##### **「学習者との交渉によるシラバス：日本語継承語学習者の読み書き学習に対するモチベーション向上を目指した試み」(A negotiated syllabus for Japanese heritage language learners: An attempt to motivate JHL learners to develop reading and writing skills)**

**Naemi McPherson, University of Hawaii, Manoa**

日本語継承語(JHL)話者の日本語学習における最大の壁の一つとして、読み書きの習得があげられる。大学で日本語を学ぶJHL話者の中には、学童期の経験等から漢字学習に対し嫌悪感を持つ者、漢字学習は避けたいと言う者が多い。またJHL話者の間にはリテラシーと会話力のギャップ、同年代のJHL話者間での日本語力の差、家庭での日本語に対する意識の違いといった多様性がみられる。このような多様性が、JHL話者が一つの教室で学ぶことを困難にすることは、Mori (2005)をはじめ様々な報告からも周知のことである。そこで、このような学生が集まるコースの指導にあたり「学習者との交渉によるシラバス (negotiated syllabus)」を採用。学習者と教師が、学習者のニーズや興味、学習に対する不安等について話し合いながら、学習事項やトピック、評価について決めていく。この交渉プロセスを通じて行う各学習者のレベルに見合った活動が、学習意欲の向上につながるのではと考え本実践を試みた。Breen and Littlejohn (2000)の主張する本シラバスの利点がJHL学習者の読み書き学習に有効であるか、本実践を通して次の2つの観点から検証する。(1) 学習者との交渉によるシラバスは、読み書き、特に漢字学習に対する意欲やパフォーマンスの向上に有効か、(2) 本シラバスの利点、問題点、またその採用における留意点とは、である。JHL学習者が持つ語彙や文化知識を有効に使い、クリティカルペダゴジーにおいて重要な考えの一つである「対話」を通し、学習意欲を高め自律学習を促す学びを目標とした試みの報告である。

##### **「理工学系ゼミ内話し言葉の特徴語 —理工学系話し言葉コーパスとBCCWJとの比較において—」(Keywords in Science and Engineering seminar talks: SESJ (Science and Engineering Spoken Japanese Corpus) in comparison with BCCWJ)**

**Yumiko Furuichi, Natsumi Ito, and Yuko Sugaya, School of Engineering, University of Tokyo; Naoko Endo, Hiroshima Institute of Technology**

本研究は、留学生が理工学系ゼミ内における発話の理解を進め、積極的に参加できるようになることを目指す。そのために、理工学系の7分野の研究室ゼミ内の自然発話を資源として構築した「SESJ (the Science and Engineering Spoken Japanese): 理工学系話し言葉コーパス」の特徴語を明らかにする。具体的には、SESJを「BCCWJ (the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: 現代日本語書き言葉均衡コーパス)」サブコーパスの白書・新聞・国会・教科書と比較することによって、理工学系ゼミ内における語彙の特徴を考察した。次に、7分野のコーパスそれぞれを上記のBCCWJと比較し、各分野の特徴語を抽出し、分析を行った。分析に用いたのはAntConcで、以下のような結果を得た。SESJは、1) フィラーやあいづち、縮約形、終助詞などの話し言葉の特徴を持つ、2) アカデミックな語彙の特徴を持つ、3) 理工学系に共通する語彙の特徴を持つ、4) 各分野の専門を反映した語彙の特徴を持つことが分かった。また、理工学系ゼミ内に

において、最も頻出する特徴語は「って」（対数尤度比62695.676）であった。日本語の教科書では、「って」は主題や問い返しならびに引用として多く紹介されているが、SESJでは、「こと、の」などの形式名詞に前接し、名詞節として出現することが最も多かった。また、「っていうか」などの挿入的な表現として使われていることもわかった。本研究の結果は、理工学系日本語教育の語彙教育だけでなく口頭表現教育にも貢献するものと考えられる。

#### **“Developing sociocultural competence in Japanese politeness strategies through the study of business e-mail discourse”**

**Lindsay Yotsukura**, University of Maryland

For intermediate to advanced learners of Japanese, developing sociocultural competence in the use of Japanese politeness strategies is a well-documented challenge. As Wetzel (2011) points out, however, cultural artifacts such as public signs in Japan may be utilized effectively to illustrate contrasts in sonkeigo vs. kenjōgo usage, and more broadly speaking, to elucidate the many ways in which the Japanese politeness system indexically points to one or more referents in a given interaction without the use of pronouns. That is, keigo inherently demonstrates social deixis. This point is a fundamental one for students to grasp if they are to become adept interpreters and users of keigo expressions. This paper discusses an approach adopted in a hybrid Japanese linguistics and Japanese business language course in which business e-mails in the author's corpus from a variety of firms such as Amazon Japan, Starbucks, bookstores, and other online vendors were used to illustrate contextualized forms of sonkeigo and kenjōgo. Through a number of reading and discussion exercises, students first learned to identify keigo forms in sample texts, then developed a receptive understanding of keigo usage and meaning in those texts, and finally moved on to acquire more active skills in adopting appropriate keigo forms in their speech and writing in business contexts. Such exercises are particularly useful in demonstrating to students how Japanese keigo expressions already encode information about the referent(s) of an utterance, thereby rendering the use of personal referents such as *anata*, *watashi*, the company name, and even an addressee's name superfluous in e-mail discourse. In the process, learners develop a socioculturally grounded knowledge of this discourse genre (Berkenkotter and Huckin 1995, Yoshimi 2008), along with a newfound confidence in utilizing keigo.

#### **SESSION 4-E: JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE SIG PANEL [ UNIVERSITY ROOM ]**

*Chair:* **Hideki Hara**, Japan Foundation, Los Angeles

##### ***Panel Title: “Japanese Language Studies in the United States: Paradigms and Prospects”***

*Panel Abstract:* Students and academics have been historically attracted to Japanese language and Japanese studies for a variety of reasons: From the post-WWII “exoticism” of Japan, to the economic expansion from the 60s to early 90s, to the current craze for Japan's popular culture. Fluctuations in federal and local educational policies and trends in job market prospects have also affected the growth of Japanese language studies in the US. This panel will explore these inter-connected and shifting paradigms, and discuss ways for Japanese language teachers to best address their students' diverse needs and motivations, recruit more students, and make a stronger case for the study of Japanese language in their institution and region by collaborating with Japanese studies academics and other related fields. After describing the current status of Japanese studies and language education, the panel will introduce examples of inter-disciplinary collaboration in language education and make recommendations for replicating them more widely in the United States.

##### **“Japanese studies is alive and well in the US”**

**Patricia Steinhoff**, University of Hawaii, Manoa

This presentation examines the field of Japanese studies in the United States in the 70 years since the end of World War II. It outlines three paradigms that have characterized US programs in Japanese studies during that time: the Language and Area Studies paradigm of the 1950s-1970s, the Economic Competition paradigm of the 1980s-1990s, and the Cultural Studies paradigm that has characterized the field from the 1990s to the present. These paradigms are important because they define how programs at the university level developed, and they have shaped the training and interests of Japan specialists. Today's Cultural Studies paradigm has attracted several new generations of students and specialists. Their interest in Japan's popular culture has been of special importance, and this presentation will explore the origins and impact of this interest. In the future, a new paradigm may emerge, but in the meantime, interest in Japanese studies (both language and culture) is stable and vibrant.

##### **“A bird's-eye view of Japanese language education in the US”**

**Susan Schmidt**, AATJ

Interest in Japanese language study has grown in tandem with interest in Japan's society, history, and culture. Enrollments have grown over the decades since the end of World War II from a few dozen college students to tens of thousands of students of all ages, at all levels, and in all types of institutional and informal settings. For students, motivations to study Japanese have also changed, in line with the paradigms that characterized the growth and development of Japanese Studies. This presentation will overview the history of Japanese language education in the United States: its expansion from college-level study to programs for elementary, middle, and high school students; the growth and widening of interest in Japan's culture, economy, and society that have drawn generations of young people to the study of the country's fascinating language. The major period of growth in Japanese language programs and enrollments coincided with the growth of Japan's economy in the 1980s and early 1990s; since that time there has been consolidation, but interest in Japanese language, in studying abroad in Japan, and in careers that involve Japan remains high – a good sign for the future.

### **“Content-based Japanese language instruction: A critical approach”**

**Ryuko Kubota**, University of British Columbia

In the field of language education, integration of content and language has been promoted in such terms as content-based instruction (CBI) and content and language integrated learning (CLIL). In this approach, the content chosen for learning can be examined critically from multiple perspectives. With a growing diversity of Japanese language learners (e.g., near native speakers of Japanese without sufficient academic language skills; learners interested in cultural, historical, and political content), critical CBI can fill a gap in learning needs and stimulate students' intellectual development. This presentation will offer a conceptual foundation for critical approaches to CBI and introduce an example of an advanced Japanese language course integrating critical CBI (Kubota, 2013, 2015). CBI is ideally carried out by a content specialist or via collaboration between a content specialist and a language instructor. However, a realistic arrangement is a hybrid model, in which a language instructor teaches both language and content (Chikamatsu, 2008). An example of critical CBI using this model is an advanced Japanese course entitled “Memories of War.” Challenging the dominant discourse on Asia Pacific War that foregrounds the victim perspective only, this course critically examines the complexity of the relationship between victims and victimizers. Through learning from multimedia resources, including popular films, YouTube videos, anime, and manga, guest speakers, and classroom discussions, students are encouraged to gain broader perspectives and simultaneously develop Japanese language skills. The course can be adapted to lower level language courses. In engaging in critical CBI, critical reflexivity is essential. Instructors should be mindful of the danger of imposing a particular perspective. Classroom dialogues should invite students to explore how particular knowledge is produced so that they can unpack multiple meanings and realities.

### **Discussant**

**Hideki Hara**, Japan Foundation, Los Angeles

## **SESSION 4-F: CLASSICAL JAPANESE LANGUAGE SIG AND PEDAGOGY PAPERS [ VIRGINIA ROOM ]**

*Chair:* **Yuri Kumagai**, Smith College

### **“WakaPoetry.net: A new development for *waka* in the Digital Humanities”**

**Thomas McAuley**, Sheffield University

In the current Internet age, students are increasingly demanding access to learning resources online – even in subjects which have traditionally employed a ‘low tech’ approach to teaching such as classical Japanese poetry. It is important, then, for staff teaching these subjects to have access to good quality online materials, to which they can direct students for self-study, use in class, or draw upon to generate their own materials. Since 2001 I have been building up a website of waka-related content – principally poems and their translations – which now holds approximately 4,000 poems, translations and other commentary and background material. This site has been used worldwide for pleasure, for research and for pedagogy, but in recent years the limitations to its current format have become apparent. These are principally: lack of Japanese full-text search for all poems; lack of clarity of organization, so it is not immediately apparent to visitors which poems are present; lack of tagging so visitors can obtain groups of poems on similar topics, regardless of collection, or period; and a lack of ‘Web 2.0’ features enabling visitors to actively engage with the content by commenting on it, or circulating it via social media. I have, therefore, embarked upon a major revision of the site, and anticipate re-launching it with all of the above issues addressed, an entirely new visual identity, additional reference material and e-publications generated from the website’s content in early 2016. This paper will introduce the new site, WakaPoetry.net, its features and content, as well as providing an analysis of the problems encountered in the revision process, and how these were overcome. This will prove beneficial to teachers and researchers in any subject area considering either a revision of their existing online materials, or the production of new ones.

### **“Women poets in a Shinto anthology in the famine years: the ‘Tsukimōdeshū’ (1182) of Kamo no Shigeyasu”**

**Robert Khan**, University of London, SOAS

Readers of Kamo no Chōmei’s *Hōjōki* (1212) will be familiar with his harrowing account of the great famine that struck Japan in 1181 and 1182, exacerbated by the Genpei War (1180-1185), a war that the famine’s severity brought largely to a pause. Amid such scenes, it seems at first extraordinary that this would be the very time that brought forth a major cultural production, the *Tsukimōde wakashū*, a poetry anthology that rivals the imperial anthologies in size, scope, and quality. Given the fact that it was conceived and executed at the Upper Kamo Shrine, by the Head Priest, Kamo no Shigeyasu (1119-1191), we may reasonably conclude, and other evidence confirms, that it was partly intended as a votive offering in a time of dreadful war and famine. In this context it is especially interesting to examine the prominence of women poets in this anthology. This paper will offer a profile of the contrasting social groupings to which the contributors belonged, be they women at court (imperial family, aristocrats, court servants), relatives of courtiers, or relatives of the compiler, noting especially the ‘grand old ladies’ who had already been active poets for thirty to fifty years. In particular it will examine their distribution profile within this unusually structured anthology: which books are ‘more female’ and why; which topics are associated with particular women; how they are grouped and sequenced (book openings and closings; pairings and other sequences, including which male company they keep), and how prominently they are located. There are some notable inclusions, exclusions, and re-evaluations, which make a significant contribution to the essential character of the anthology. This in turn helps explain how this anthology was so influential for subsequent imperial anthologies, especially the *Senzaishū*, *Shinkokinshū*, and *Shinchokusenshū*. The specifically ‘shinto’ character of some of these women’s poems will also be evaluated.

**"An exploration of genre hybridity and its thematic implications in Shōtetsu's travel diary 'Nagusamegusa' (1418)"**

**Penelope Shino**, Massey University

This paper utilises the lens of recent Western theories of travel writing to examine aspects of genre hybridity in the travel diary *Nagusamegusa* ('Grasses of Consolation,' 1418) by Zen monk-poet Shōtetsu. The scholarly consensus on travel writing is that although the travelogue is a genre in and of itself, it is also typically a hybrid of several other genres. However such theories have almost entirely been based on studies of works by Western travellers in European languages. The present paper wrests the theory from its original context to gauge the currency of the theory in medieval Japanese travel writing, using *Nagusamegusa* as a test case. A work from a very dissimilar cultural and literary milieu, *Nagusamegusa* recounts a four-month trip Shōtetsu undertook in 1418, aged thirty-eight, leaving Kyoto to stay at Kiyosu Castle in Owari Province. His poetic mentors Imagawa Ryōshun and Reizei Tamamasa had died the previous year, and Shōtetsu was on the cusp of inheriting the de facto headship of the Reizei school of poetry. The travel experience per se took a mere three days and occupies just under half the account in pages. On examination, Shōtetsu's travelogue proves to be a startling hybrid of genres, styles and voices, sharing many characteristics with its Western counterparts but also some obvious differences. If any unifying generic thread can be discerned, it is the insistent refrain of waka poetry. The final part of the paper shifts perspective and speculates on hybridity's thematic function in *Nagusamegusa*, given that it was composed by an individual who defined his identity as 'neither bird nor mouse', and who was experiencing one of the most shape-shifting eras in Japan's cultural history.

**"Collaborative curricular initiatives: Translating between the disciplines of language and literature"**

**Yuri Kumagai and Kimberly Kono**, Smith College

Through the linking of a language course and a literature seminar, we have developed a curriculum that acknowledges literary and language study as unique disciplines and fulfills the shared goal of critical literacy. In Fall 2013 and Spring 2014, we concurrently taught an advanced-level Japanese language course and a modern literature seminar, both of which focused on ethnic "minorities" in Japan. In the language course, students engaged with a wide variety of materials in Japanese, including literary texts, film, manga, essays and journalistic pieces. Students in the literature seminar read literary texts in English translation and supplementary materials, such as literary criticism and historical background, in English. Unlike many language-across-the-curriculum formats where a language course is regarded as an add-on component, we offered both courses with equal weight in order to recognize the different and equally important contributions each discipline brings to the study of Japanese language and culture. The linked courses encouraged students to utilize their linguistic and literary analytical skills and integrate their learning in both Japanese and English. Through reading the same/similar texts and discussing surrounding issues in both languages, students developed different facets of their critical literacy, such as acknowledging how the cultural context of language shapes different approaches to a topic. Based on the analysis of individual interviews conducted after the course, our study revealed students' heightened awareness of translation as a critical element in the development of linguistic and cultural fluency. By requiring students to read the "original" and the translation, our curriculum defamiliarized student approaches to reading by bringing awareness to the limitations and possibilities in the practice of translation. Namely, students realized both the gaps between languages and the multiplicity of language choice. Our research also emphasized the different facets of collaboration between 'language' and 'content' instructors integral for curricular success.

## **PART TWO**

### **ACT Theatre**

**700 Union St., Seattle, Washington**

**Thursday, March 31, 6:00 p.m.**

**6:00 p.m.: Refreshments, Membership Update, and Open Forum**

**7:00 p.m.: Conference Keynote Speech**

**Laurel Rasplica Rodd (University of Colorado, Boulder):**

***"There is nothing whatever/that is not dependently existent": A Lifetime in Languages***

**8:00 p.m.: Networking**

## **Other AATJ-sponsored Events in Chicago**

Friday, April 1, 12:45 – 2:45 p.m.

Room 303 (Level 3), Washington Convention Center

### **Scholar, Translator, Teacher, Leader: In Honor of Laurel Rasplica Rodd**

This panel is part of the Association for Asian Studies program and requires registration for the AAS conference.

*Chair:*

Amy Vladeck Heinrich (Columbia University)

*Panelists:*

Sonja Arntzen (University of Toronto)

Kyoko Saegusa (University of Colorado)

Stephen Snyder (Middlebury College)

Motoko Tabuse (Eastern Michigan University)

Friday, April 1, 7:30 – 9:30 p.m.

### **Classical Japanese SIG presentation and networking meeting**

Columbia Room, Seattle Sheraton Hotel

### **Approaches to Teaching Waka, in Honor of Steven Carter and Laurel Rasplica Rodd**

This session will bring attention to the scholarship and pedagogy of Steven Carter and Laurel Rasplica Rodd, share knowledge about current approaches to teaching *bungo* and *waka*, and consider what efforts must be made to ensure the future of *waka* studies at our institutions.

The panel will be introduced by Anne Commons (University of Alberta) and Christina Laffin (University of British Columbia). Edward Kamens (Yale University) will present on “Waka: The Challenge of Access” and discuss some of the challenges we must overcome in order for students to be able to use online databases and platforms like the Shinpen kokka taikan and the Koten Library. Mack Horton (University of California, Berkeley) and Joshua Mostow (University of British Columbia) will discuss the contributions of Steven Carter and Laurel Rasplica Rodd. Steven Carter (Stanford University) and Laurel Rasplica Rodd (University of Colorado, Boulder) will each present on their teaching approaches. All are encouraged to take part in a lively general discussion.